
ひらひらと舞う、楓の葉

如月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひらひらと舞う、楓の葉

【Zコード】

Z9516V

【作者名】

如月

【あらすじ】

垓下の戦い。

彭城での討ち合いの末、遂に羌楓軍は項籍羽を下した。

しかしそれは、最愛の想い人であり主君であつた、劉邦

すもも李と引き換えた勝利だった。

深い悲しみは、新しく開かれる扉の鍵。

恋姫舞う世界の物語。
劉の血に枷を嵌めた、

太古の愚かモノの御話。

第零葉……終わる物語（前書き）

久方ぶりで御座います。如月で御座います。
設定の見直しと改善、大幅な推敲を致しました。

初めての方はどうぞ宜しくお願ひいたします。
前から、ご覗願にして下さっていた皆様。
今作も、何卒ご愛顧のほどを宜しくお願ひいたします。

第零葉……終わる物語

「おい……」

ただ身体を打ち付ける激しい滂沱の雨が、静かに静かに。赤く赤く激しく、男の頬を伝った。

愛おしげに抱き締められた彼女の、かつて澄んだ輝かしい銀の光を灯していた瞳は閉じられ、顔には蒼色が彩られ始めていた。元は紅く紅く紅潮していた唇も、蒼冷め始め、温かさを失っていく。

脳裏に過ぎるのは、ただ切に共に歩んだ日々。

罅割れた思い出が、ぜんまい仕掛けの時計の様に、終わりを奏でている。

口から漏れた嗚咽は、ぽつかりと胸に開いた大きな穴の様に、虚無を孕んでいる。

「おイツ……！」

彼女が何をしたと言つのか、と男は慟哭を上げた。こうならねばならなかつたのか。何故。

咆哮、声に成らない悲鳴。そこに残つたのは悲哀なんて陳腐な言葉で顯せるほど単純なモノではなかつた。

男は、悔むのか、悲しむのか、憤るのか、どれも選べずには、ただ唇を噛み締めた。

あるのは、唇から確かに、つづ、と伝つ、唯ひとつひらの、楓の葉。瀑布の様に降り注ぐ雨などでは決して薄まる事の絶対に無い、血で血を洗う、復讐の誓いの証明。

艶やかな桃色の髪に、深紅の涙が珠のように伝つ。

凍えるように震える口先から、震える言葉が滑り落ちた。

「諦めてなんか、いませんから」

ひらひらと舞う楓の葉。

「未だ」

これは、唯一つ。もう華を咲かせる事の無い、古寂びれて死んだ幽かな樹の、最期の深紅の葉。

睫毛が一瞬だけ動いた気がして、生氣を双眸に灯す。

しかし、また小さく虚無を瞳に戻して囁いた。

「たつた一人だけの、この、『大切な思い出』を」

ぐらり、と身体が揺らいだ。

黒い黒い世界の淵を、ただただ滝壺へ呑まれていくよう、宙に投げ出されて。

男は、墮ちているのを感じた。落下と言つた方が適當か。しかし、それが、何を意味する確認する氣もなかつたし、気にすらならなかつた。

地獄か。無か。逝きつく先にあるのは。

だからどうと云つ事は無い、男は呟いた。

胸にあるのは、抱えて溢れんばかりの楓の葉と李の花びら。

次なる世界へと、そのまま。

第零葉……終わる物語（後書き）

まずはプロローグ。

「指摘や「指南、誤字脱字、改善点や嫁宣言から世間話まで幅広く感想にお寄せ下さい。

第一葉……IリJから始まる（前書き）

第一話です。

ちよいと変えてみましたが、行間を開けたほうが見やすいですか？

第一葉……ここから始まる

「美しい…」

誰かがそう呟いていた。咲き誇る桃の花は、見る人々の心を奪つた。それほどに優美。

風が吹けば花びらが舞い踊り、光り輝く陽の光を受けて美しく映えた。

涼しげな木陰、唄う草木。安寧を謳歌する景色。

息を大きく吸いこんで、吐き出す。よし、と小さく囁いて、少女は一人の少女を引き連れて歩みだす。

一人は、桃色の髪を靡かせ、物憂げな瞳に希望を湛える。

一人は、濡れたように艶やかな漆黒の髪、凛としたその瞳は希望へと傳ぐ。

一人は、橙の髪の上に虎が吠え、無垢な瞳は希望と共に。腰に下げた徳利の中で、とぶん、と揺れた水面。桃の花びらが触れて、波紋を呼ぶ。

三人は立ち止り、並々と透き通つたそれを杯に注ぎ、掲げる。

「我ら三人、姓は違えども姉妹の契りを結びしからは、心を同じくして助け合う事を誓つ。同年、同月、同日に生まれることを得ずとも、願わくば同年、同月、同日に死せん事を」

」

玲瓏な声が響く。風が止んだ、その音色に聞き入つた様に。カツン、と堅い音が盃から発された。

美酒の匂いが漂つ。晴れ渡る蒼穹が、その芳しい馥郁を欲して、雲を何処かへと吹き飛ばす。

麗らかな日差しがより一層心地よく、三人を祝福するように照ら

した。

亭々とした桃の木の枝に腰かけた男は、鼻をすんすんと鳴らした。

鮮やかな朱色の髪。深淵を想起させる諦念とも無為とも感じられる、泰然自若とした白銀の瞳に、猛禽を思わせる鋭い眼差し。怜俐さを強調するような銀縁の眼鏡。十一尺弱の体躯はすらりと華奢だが、携えた九尺ばかりの両刃の剥き身の刀とも相俟つて、一本の銳利な槍のようだ。

男は一つ大きな欠伸をして、次に眼鏡を服の布で拭く。そのまま細い眼で三人を見据える。大した距離も無いが、裸眼では世界が霞んで見える。

もう一度、眼鏡を掛け直して見やつた。

銀の眼鏡越しに見えた姿は桃色の髪。

風に揺られて大きく波打つその少女を大きく瞠目して、男は息を呑む。

静かに佇む少女は髪を搔き上げて、微笑む。

自らに向けられたものではないと解つていながらも、この手の中で果てた少女が断続的に頭の中で蘇つて、重なつて、自分に向けられたものだと思いたくて、錯覚する。

手が震える。否、身体が、震えている。武者震いか、それとも戦慄か。

「いえ、これは……定め」

男は瞼を伏せて、鋼鉄の爪で手首を搔き切る。

男は滴り落ちるそれを、高々と掲げた。

風が一陣。

「きやつ！？」

少女は可愛らしく悲鳴を上げ、突然の突風に足元を掬われ、しゃがみ込んだ。

元来た道を、先に歩み出していた黒髪の少女が気付いて、側に駆け寄った。

「大丈夫ですか！？ 桃香様！」

「愛紗ちゃん……」

桃香、と呼ばれた少女は、何でも無いよ、と返して苦笑しながら立ち上がった。

橙色の髪の、背も桃香よりも幾分か低い少女も同じく駆け寄る。

黒髪の少女 愛紗の心配そうな表情とは相対的に、橙髪の彼女 鈴々のそれは楽天的な笑みに満ちている。

靖王伝家が腰の徳利に当たつて小気味良く鳴つた。

一人を一瞥すると、頭に何かが触れた、紅葉。

怪訝そうに見上げて、桃香の瞳に赤い赤い赤が映り込んだ。

「わあ…………！」

「壮大、ですね…………」

「すごいのだ…………」

螺旋を描くように、竜巻に巻かれて紅葉が舞う。

憑かれたように只、只管、その紅の弾幕を見つめる。

空を仰ぐと、視界を覆わんばかりの紅葉の葉。

桃の花びらと交わって漂う紅の葉。

愛紗の嘆息を皮切りに、刹那だけ、音が消えて、風に攪われた葉と花びらの舞踏が三人を呑んだ。

興奮を醒まさぬようになると、加速した風は吹き荒れて、轟音と共に三人を打ち付ける。

「愛紗ちゃん！ 鈴々ちゃん！」

「桃香様！」

「桃香ーー！」

地から足が離れそうになるほどどの飄風の中で、繋がれる手と手と手。

下から、上から、左から、右から、東西南北から、前後から吹く、空気を裂く風は、一転、全て下からに集中して。

吹き上がる。浮かび上がる。地へと繋がっていた足は離れて。繋がれた手は離れず。

「ねえねえねえ！ 何これえ！」

「解りませえん！ つべ、口に入つた！」

「あははははあーーー！ すごーいのだーーー！」

桃香が半分歓喜、半分涙目で喰いて、愛紗も謎の現象に戸惑いいつつも冷静にならうとするが葉と花びらが邪魔して、鈴々が興奮気味に叫んで。

未知の体験に、三者三様の想いが生まれたが、それも段々と一つに成つて行く。

顔を見合わせて、喜色を満面に浮かべる。

『樂し

いー』

叫びが重なつて、やがて笑みが沸々と込み上げて、激しく加速する轟音へと重なるように、哄笑の声が響く。口元に浮かんだ解顔は消えることは無くて、少女らしい無垢な表情を浮かべて。はためく服の音も、ぶつかる武器の甲高い音も、全て笑い声に呑まれた。

下から吹き荒れる柱の様に縦長に集束した、桃と紅の暴風。

包みこまれたのも束の間、勢いが徐々に薄れていく風。ゆっくりと、地へとぺたん、と尻餅をつきながら着地した。それでもまだ高揚感は満ちていて、興奮は醒めない。楽しそうに歪んだ口元は直らない。

あはは、と腹を抱えて、ひらひらと降り注いでくる楓の葉と桃の花びらに埋もれる。

桃の花びらと楓の葉。
季節を、時を、超えて。
少女たちへと。

まだ。未だ。未だ時は満ちてはおらず。

高みへと昇れよ劉の血。
天を頂け。天を戴け。その血の赴くままに。

第一葉……「」から始まる（後書き）

誤字脱字など」指摘や、「意味わからん」など宜しくです。できるだけ、伏線に触れずに内容開示致しますので。

第一葉 異国情緒（前書き）

前作の下地とした書を疋しを張ります。
どうも。瞼の重い如月です。
どうですか、行間を意識してます。

第一葉……異国情緒

燃え盛る紅蓮の焰。荒れ狂う煙に、下卑た嗤い声。

広大な土地を、黄が、塗りつぶしていた。

聞こえるのは、泣き声、断末魔、燃える音、夥しい人馬の唸り声。落ちる涙は、波紋を描く。見るも無残な、血溜まりに。

私は、何もできない。
私には、何もない。
武もない、文もない。
あるのは、血筋だけ。

「桃香様、お下がりください！」

「桃香、さがるのだー！」

守られなければ生きてゆけない、脆く儻いモノ。

「う、うん……」

だから、何も守れない。

私が来れば、誰もが、顔を綻ばせて喜び、涙をぬぐい、武器をとる。

だけど、全てが終わった時、生きている人は少ない。
私がもつと、強ければ……彼らは生きていたかもしけない。
私が弱いばかりに。

「終わりました、桃香様」

血をぬぐいながら、愛紗ちゃんが駆け寄つてくる。

肩には、偃月刀。

弱を守り、悪を斃す、正義の剣。

「どうされました…？」

「なんでもないよ。

「ただ、自分の無力さに悲しくなったんだよ」

すると、愛紗ちゃんは困ったような表情をした。

煙がもくもくと立ち昇つている。

私は虚ろに見つめる。

「桃香様は、無力なんかじゃありませんよ」

「無力だよ……！ 村一つ守れない……！」

思わず大声を出してしまった。

田を見開いていた。驚いたんだね。

「めんね…。

「いえ…」

頭を下げる愛紗ちゃん。ああ、頭を上げて。
泣きたくなつてきちゃつた……。

「桃香、元気を出すのだー！」

私を励ますと、鈴々がたくさんの葉っぱを持ってきた。
紅葉……どこにそんなにたくさん……。

私の脳裏には、大分前の、誓った時の紅の嵐を思い出した。

「ありがとう、鈴々ちゃん。どこにあったの？」

「こっちなのだー！」

そして手の中のものは、勢いよく上空へと投げ捨てられ。

視界を紅葉に覆われる中、私は強い力に引っ張られた。
すると、私の手を、引いて駆けだした。私も、駆け
る。

此れは、血に染まりたる葉。嘆きなさるな、力を欲すなら、
叶えてあげましょ。

精神を落ち着かせるような、静けさの中。

「こっなのだー！」

私から離れて、嬉々と、楓の木を指さす。

それは、息を呑むほど美しく、雄々しい巨大な、朱に染まつた紅葉だつた。

風に揺れる木の葉。不動な、静かな幹。

私は、ただその莊厳さに圧倒されていた。
心を打つ心拍が、緩まつていいく。

震えた指先に、熟した色の紅葉の葉が触れて。

「桃香様、何者かがおります」

小声で愛紗ちゃんが、耳元で囁く。

その右手は、既に得物を握っている。

「待つて。まだ悪い人かどうかなんて分からないよ」

「大丈夫なのだ！拾ったときに、集めるの手伝ってくれたのだ！」

「だつて。大丈夫みたいだよ」

「ですが……！」

「いいから。それにせ、いざとなつたら護つてくれるんでしょ？」

ああもう、と渋々納得してくれた愛紗ちゃんを、片手で制して、私は歩みよる。

木に凭れた静かな人の影に。

「あのー」

私は声をかけた。男の人のようだ。
すつごい身長が高い。私の頭何個分か分かんないくらい違う。
目を瞑つているみたい。

「あのー……」

田の前に楓の葉がよぎる。私がそれを弾こいつとして

風が少し強く吹いた。

「あ」「何用ですか」

起きていたようだ。

綺麗な声だ。少し低いけど、女人みたいに澄んでいて。その顔も、男の人のようにゴツゴツしてなくて、整って綺麗で。銀縁の眼鏡が知的な雰囲気を出していて、どこか話しかけづらくて。

でも私は、一步踏み出した。

「はじめまして、私の姓は劉。名は備。字は玄徳。貴方のお名前は何と云うんですか？」

彼が瞳を開いた。その白銀に吸いこまれるようだ。

「桃香様！」

走り寄つてくる愛紗ちゃん達。大丈夫だよ、優しそうだし。だから、黙つて手を振つた。焦りと心配で表情をいっぱいにしている。

……もう、せっかちなんだから。

「はじめまして、劉備。我が姓は羌、名は楓、字は軍」

「キョウフウ、イクサ……さん？」

「是」

羌楓さんは、優雅にうなずいた。

朱色の髪が風で揺れて、彼は鬱陶しそうに前髪をよける。降り注いだ紅葉が、その朱色の髪に恐ろしく似合つ。

異国情緒漂う銀色の双眸と朱色の髪が、どうにも人から乖離しているように見える。並はずれた長躯も、携えた両刃の長剣も、恐ろ

しい程整った田鼻立ちも蒼白い肌も、それを際立たせる為の要素でしか無くて、一つの究極的な『歪』な美しさを物語っている。人に非ざる者。正にそんな言葉が相応しい。

暫く静観していた愛紗ちゃんが、警戒を解き始めたようで、偃用刀を下ろした。

「もう。やれやれ、桃香様が許したのならば、私たちも許さなければいけないのでしょう」「やうなのだ!」「やうなのだ!」

「じょっとばかり愛紗ちゃんは泣々と、鈴々は元気よく彼の前へ出る。

「私の名は関羽雲長。宜しく、羌軍殿」

「張飛なのだ!..」

「羌楓です」

澄みきつた水面のよつなその表情は、どんな悩みも吸いこむよつで。

胸の蟠りを、少し、前向きに解してくれた。
彼は天を仰ぐ。銀の眼鏡の縁に陽の光が反射して、眩しくて少し瞼を閉じる。

それからまた開ぐと、真撃な瞳と視線が合つた。
羌楓さんの眼が、スッと細まる。

「劉備、懐かしむ前に、やることがあるのですね?」「え?..?」

私のその様子に、彼は満足そうに笑った。

「分かりますよ。だから紅葉を見に来たのでしょ」

「……うん、そう、かもしない」

その全てを包み込むような瞳は、私の全てを見透かしていくよう

で。

「でしょ」…なら、お行きなさい」

彼はすつ、と村の方角へ指をさす。

私たちの視線は、そちらへ向いてしまつ。

「決して貴女『方』は弱くない。ただ、ちょっとばかり、足りないだけ。何が、とは言いません。ですが、貴女には前を向いて人を救い、戦う義務と使命がある」

彼は私たちに背を向ける。朱色の髪が翻つて、風に靡いて波打つた。それが楓を彷彿させた。

「千里の道も一歩から。やらねば、始まりません」

…… そうだね。

その通りだよ、羌楓さん。

進まなくちや。

「ありがとうございます、羌楓さん」

歩き出す。

踏み出す足取りは軽い。

携えた靖王伝家は重いけど、関係無い。

「良い眼になりましたね」

ほんとに、ありがとう。
笑顔で、頷いて見せる。
それを見た彼も笑み返してくれた。

「待つのだーー！」
「桃香様！？お待ちになつてくださいーー。」

こんな私にも、助けを求めている人がいる。
せめて、ほんの少しでも役に立つ為に。
向かう足取りが、早く、速く、風が背中を押す。
腰に下がた靖王伝家が、嬉しそうにかたかたと音をたてた。

大陸に光を灯す者よ。
お行きなさい。劉の名を冠する者よ。この遙かなる

平安を齋す者よ。

貴女の為ならば、私は、盾となりて敵を塞ぎ、剣となりて敵を屠り、矢となりて敵を貫き、鉾となりて敵を薙ぎましょう。

『軍』の名に於いて。

第一葉 異国情緒（後書き）

感想をお待ちしております

……そろそろメインに入れると気がするんだ……

第二葉 英雄の足音と少女の溜息（前書き）

第二葉 英雄の足音と少女の溜息

雨の上がつた、燐然と口が照らす暁下がり。
流浪を繰り返す桃香達の陣屋に向けて、軽快な音を立てながら簡素な鎧を着込んだ女が馬で闊歩していた。

周囲には同じの鎧を着固めた屈強な男達が付き添つてゐる。

「 あそこですか」

緩く優しい丁寧な物腰とは裏腹に、その表情は緊張で凝り固まつてゐる。

岩肌の覗く山の斜面の、木々が連なる、平らな上に陣が張つてある。

迫るのに好し、守るのに好し、視るのに好し、視られぬのに好し、逃げるのに好し。

上策ですね、と一人囁き、近づいていく。

付近に止まり、警護の兵に気付かれる為に、懃々見える場所で立ち止まる。

瞼を閉じて待つ事暫し、気付けば、警護の兵が女を囲んでいた。警戒の色を露わに、各自得物を構えている。

女は、気付けなかつた事を心で恥じて、顔には出せずに、凛と声を放つた。

「右中郎将、朱儁公偉に御座います。貴殿等義勇軍の大将たる劉玄徳殿と話したいのですが」

そこで、慌てて兵士たちは包囲を解き、一箇所に集まると陳謝した。

構いません、と応えて、女 朱儁は先を急ぐ促した。

「暫し御待ち下さい、只今取り次いで居りますので.....。せや、此方に腰を掛けて下さい」

「面目御座いません。では、御言葉に甘えて」

兵士たちも、突然の官軍の将の来訪に戸惑つてゐるようだ。

当然だ。元は農民と庶民ばかりの義勇軍なのだから。

……しかし、彼らは黄巾になるか義勇となるかの瀬戸際の者だつたのだから、王朝引いては官軍を恨んでいる者も少なくない筈なのに　　内心では思つている者も居るだらうが　　、
朱儁と対峙しているのにそれを億尾にも出さない。それだけでも大したものだ。

更に良く訓練が為されていて、それを良く受けている。

これでは、官軍よりも練度が高いではないか、と困つたように頬を搔いた。

出された茶を啜り、朱儁は一息ついた。

そこで、自前の兵士の一人が、耳元で囁いた。
着たようです。朱儁は黙つて、解つてていると言わんばかりに頷いた。

瞼を開けて、義勇軍の大将たちを見据える。

「お待たせしてごめんなさい。始めてまして、私が劉備です。劉備、

玄徳。こちらが愛紗ちゃん

　　関羽、もう一人が鈴々ちゃん

　　張飛です」

「お初にお目に掛かります、我が名は関羽。関雲長に御座います」

「鈴々は張飛なのだ！　張翼徳なのだ！」

入ってきたのは、三人の少女だった。

朱儁が見るに、一人は勇猛。中心の、桃色の髪の少女は、未だ発展途上と言つたところか。

とは言え、勇猛な二人を惹き付けて兵士を鼓舞し従える「徳だけではなく、武力も知力も、伸び代を持っている。

あの華々しい勲功はこんな年端も行かないような少女達が、と朱儁は歯噛みしそうになつたが、未だ自分も若いんだと考え直して心持を明るくした。

少し気分が良くなつた気がした朱儁。

「此方こそ始めて。私は右中郎将の朱公偉と申す者です。此度は、御会いできて僕偉です」

頭を下げる官軍の将に對して、桃香は内心焦った。自分のような無位無冠の者に頭を下げるような官軍の将なんて、聞いたことも無い。前代未聞だ。

噂通り、下賤にも隔たりなく接するようだ、桃香は改めて感心した。

また、その様子から何かを感じ取つたらしい愛紗は、部下を呼ぶと、耳元で二言三言と囁いた。

命を受けた義勇軍兵士が一礼して走り去るのを見送つて、朱雋はその真摯な黒い瞳を三人に向けた。

「突然ですが、劉備殿、我々に力を貸して頂けませんか？」

特に慌てた様子も無い桃香、ある程度は予想していたようだ。愛紗はやつぱりか、と顔に書いてある。

愛紗は桃香に目配せして、桃香が頷くのを見て、

「構いません。最近になって、黄巾の連中も骨のある者が出てきて、攻めあぐねていたのです」

「ええ。ここいらには少し普通の黄巾とは違つ、別の意味で攻め難い連中が巢食つているのですよ」

「ふえ？ 別の意味ですか？」

「原始黄巾党、と呼ばれる軍団をご存知ですか？」

「そう言えば、庶人曰く、原始黄巾党は、虎のように勇猛にして秋の稻穂のように礼儀深く、名譽と誇りを重んじて悪を駆逐する、とか。まるで英雄のように讃えられていました」

「そしてその筆頭が、波才、と云う男なのです」

「波才？ 聞いたことある？」

桃香が首をかしげた。一人とも首をかしげている。

「ありませんね」

「ないのだ！」

「そうでしょう。彼は、多くを語らない。未だ『逆賊』でない、黄天を掲げた『革命軍』であつた時代の勇将ですが。次第に他の黄巾党が悪逆非道を行い、民を虐げ土地を屍を踏み躡り始めるに、逆風

が吹き荒んでくるようになりました。すると、忽然と配下と共に韜晦してしまつたのです」

「どうへ？」

「さあ。しかし、その間にも多くの悪逆の同胞をもとの手にかけ、彼は未だ張角・張梁・張宝の生存を信じ続けあらゆる敵と戦つてゐるのです。同じ黄天の士とも、蒼天の士とも」

「…凄絶だね」

「更に波才軍は、穎川周辺の農民を呑みこみ、今も尚爆発的にその数を増やし続けてゐる」

「それだけ、信も厚いのでしょうかね」

「まんま、英雄なのだ」

「…………はい。だから攻め難いのですよ。何も考えずに奪つて殺して拐つて犯すだけなのならば、容赦無く滅ぼせるのですがね。彼らは、彼等は、眞面目にこの大陸の未来を憂いでいるか」「できるなら、戦いたくないね…」

憂うように桃香は呟いた。

嘆息交じりに朱雛。

「しかし、彼は多くの命を刈り取つてしまつた。彼が腐つた官軍や領主だけを襲撃していただけなのだとして、腐つても官軍は官軍。國賊は國賊ということです」

「だから、滅ぼさなければならぬ、ですか。何とも世知辛い」

「全くです。だから力が多く必要なのですよ。彼を、正しい道に導くために」

彼女の瞳は決意に満ちている。膝の上に膝を乗せ、顔の前で手を合わせる。

試すような、挑むようなその眼差しが、三人の英傑に注がれた。

沈黙が場に横たわると、それを桃色に裂く。靖王伝家が、陽を反射して煌めいた。

桃香は身を乗り出した。

「やります。むしろやらせてください！」

「そう言つて戴けると、有難い。どうかご助力を頼みます」

そう言つて深々と頭を下げた。

上がつた時には朗らかな優しい笑みが浮かんでいた。

「私の真名は、岩鏡。善き友と成れるであらう劉備殿、関羽殿、張飛殿には是非」

「宜しくね、いわかがみさん。私は桃香だよ」

「此方こそ宜しくお願ひいたします。岩鏡殿。私は愛紗です」

「鈴々なのだ！ 宜しくするのだ！」

すると朱儁

岩鏡は深い笑みを見せた。

安堵と、純粹な歡喜。

「これで一安心ですね、朱儁様」

朱儁配下の兵が、ほつと胸を撫で下ろしながら言つた。

岩鏡は膝をはた、と叩きながら立ち上がる。

陣屋の扉を開けると、所々ぴょんと撥ねていた黒い髪が風に靡く。涼しげに眼を細めて、振り返つた。

「ええ。一旦は我々も陣営に戻ります。合流の詳細は追つて連絡しますので。では」

彼女が去つてから幾許か。

既に陽は西の彼方へと向かい、月の淡い光が地上を照らす。

官軍の将の来訪を終えたことで、張りつめていた緊張感が解れていつた。

再び劉備率いる義勇軍の陣地に、静寂がその身体を横たえる。

蠟燭の灯りが揺らめく中で、桃香は靖王伝家を磨きながら、ふとした寂寥感に苛まれていた。

最近は人出が足りず、一人になることも多くなった。

今は、愛紗は何時でも出動できるように兵站を。鈴々は兵たちの鼓舞を。

桃香は、久しぶりに感じるその寂寥感を拭いきれず、不安げに眉をしかめた。

溜息が漏れた。

上に翳し、その金色に輝く刀身に映った自身の顔を覗き込んだ。
映つたのは只の少女。

それは劉備玄徳ではない。

義勇軍の大将である『劉備玄徳』ではない。只の『桃香』と云つ
少女でしかない。

恋しげに、切なげに漏れたのは、桃色の溜息。

岩鏡の出動要請はいつ来るか分からぬ。

不謹慎だとも知りながら、桃香の脳裏には数多の紅葉が舞つてい
る。

ひらひらと舞う楓の葉。

「軍さん……」

溜息が桃色なら、頬も心も桃色。

虚空に投げ出された霧散するだけの言の葉は、僅かに震えていた。
彼が居れば、この不安は和らぐのだろうか。

和らぐだろう。桃香は答えを知つてゐる。知つていて、
敢えて自問自答した。

だから。

「何が、足りない、か解つた時、軍さんは、来てくれるはずだから」
それまでは、それからも、胸を張つて『劉備玄徳』でいなければ
ならない。

煙の臭いが、陣屋に、僅かに、臭つた。
墮ちた『英雄』の影が、直ぐ其処に。

第四葉……英雄の産声（前書き）

更新が遅れてしましました。第四話です。

「波才の兄貴」

砂煙の中を、ざんばらな金髪の女が、一人の男に歩み寄る。

背景には紅蓮の焰と死屍の山がある。

死屍の山に、『朱』の文字が刻まれた旗が突き刺さっている。

その僅か中腹に腰を掛けっていた波才は、俯いたまま呼び声に首も向けずに声を返した。

「何だ」

「いいのかよ？ 朱儁軍は腐った官軍じやねえって、波才の兄貴も知つてたはずだろ？」

「ああ」

「朱儁の軍は皇甫嵩の軍と同じで、民に優しく義に厚いんだろ？ なら、こんなのは兄貴の信条に反するんじやねえか？」

『朱』の旗の翻る、死屍の山を指差しながら言つ。しかし波才は静かに、何も語らない。

何でもいいけどよ、と後に付け加えて、女は巨大な戦斧を担ぎ直した。

顔は燃盛る炎を向いているが、視線は真つ直ぐ俯く波才を貫いている。

批判する訳でも称賛する訳でもないその純粹な問いかけに、波才は頭を抱えて、表情の闇を濃くした。

「確かに、反するな……」

「なら、なんでだ？ 僕にくらいなら、教えてくれてもいいだろ？」

「そうだな……」

顔を上げた波才の表情は、炎の影で良く見えないが、ひしひしと肌に伝わる程に強い感情を秘めていた。

面食らう女性。

そこには、強い恐怖と怯えと後悔があつた。

「はつきりと言えば」

一旦切つて、波才は空を仰いだ。

その瞳から一滴垂れたように見えたのは幻だらう。

そんなもの、彼から枯れる程に出尽くした。

「怖いんだ」

「怖い？」

思わず聞き返した。獅子の様に勇猛な光を宿した瞳が、大きく開かれた。

少なくとも女が初めて波才と出逢った時は、そんな感情とは無縁なように思える程に使命に燃え、義を唱え続けて、蛮勇などではない確実な剛勇さを持つて居た筈だ。

だから、今の無口でガタガタと震える波才は、本当に本人かどうか疑わしいほどであった。

「何が怖いんだ。波才の兄貴は、俺の知り合いの中で俺の次に強いぜ？」

「……」

「ちつ、何だよ？ 何が怖いんだ」

「全て、だつて？」

「我に仇為す全ての存在が」

「らしくないな。いつもの兄貴らしくない」

とは言え、波才の異変には以前から気付いては居た。

大分前から、張角・張染・張宝と連絡が取れていない。

それから眼に見えて白髪が増えてきた。振るう剣速も落ち、飯を食う量も減った。壺れ、酒を良く呑む。自分を諭すように自己暗示をして、独り言も増え神頼みするようによく祈つている。

口には出さなかつたが、眼に見えてその変化は顕著だつた。

死臭を含んだ温い風を頬に浴びながら、此処にはもう白波賊をしていた自分を諭して共に歩もうと言つてくれた『波才の兄貴』は居ない、といつことが、心に染み込んできた。

「愛想を尽かしたか？　…見捨てないでくれ、などとはつ事も云つ
權利も我には無い」

口と表情がまるで一致していない。

隈で真黒な目元、白髪の交じつた黒髪。真つ赤に腫れ上がつた紅
い眼。

嘗て格好良いだろうと、目元に赤く塗つていた化粧も、汗で流さ
れて血涙にしか見えず。

独りになつてしまふと孤独に怯える童子のような面構え。
波才を慰めてあげられない自分へと、何時までも女々しく弱音を
吐く波才への腹立たしさ。また、寂寞。嘆かわしくて、辛くて、切
なくて、心が締め付けられるように軋む。

「…………安心しろよ。俺は、兄貴を、見捨てたりしねえよ」

二人の間に沈黙が降りる。それは以前のように心地よいものでは
なくなつていたが、それでも二人は動かない。ただ、縋りつく側が
変わつただけ。立場が逆転しただけ。いつも通りだ。
ぐつ、と女の拳が強く握られる。手の平が赤く赤くじわりと滲ん
で、一滴の深紅が滴る。

あの時、確実に助けられた。この男に。

部下に見捨てられ、仲間に見捨てられた俺に、敵ながらに斬りつ
けられながらも手を差し伸べてくれた。

俺は知つてゐる。本当の兄貴は勇猛果敢な強者だ。心優しく、民を
慮る事の出来る、本当の英雄だ。

だから、絶対にこの男を助ける。俺に、足りなかつた『叶えた
い夢』を与えて、自分だけ蚊帳の外へ退場なんて赦さねえ。

この際、王朝なんて、どうなつたつていい。それで叶えられるの
ならいくらだつて利用してやるし、叶えられないんだつたら、この
戦斧で叩き潰す。

重要なのは、兄貴達が追い求めてやまなかつた夢。民の平穏と戦
無き地平。

そして波才の兄貴がそれを成し遂げること。
絶対に叶える。この名に懸けて。

徐公明。この俺の名に於いて。
鬼灯。この俺の真名に於いて。

血を手の平に擦りつけながら、傍らの戦斧を拾い上げる。

「俺は、徐晃だ」

だから、俺は斃す。

聞こえる足音。人馬の駆ける音、嘶く声、怒声。

波才の兄貴を殺すつもりなら、須く悉く万物一切、俺の斧の鋒だ。
護り抜いて、生き抜いてやるよ。
波才の兄貴は、俺ンのだ。

第四葉 英雄の産声（後書き）

徐晃、でました。

波才と抱き合わせ販売中です

第五葉 舞踏会への赤絨毯（前書き）

繫^モきで御座^スい。

分かりにくい処があれば書き足しますので。

「御伝えしますッ！」

暗がりに煙の臭いが渦巻く森の中、一人の兵士が転がり込んでいた。

兜には矢が刺さり、腕からは血を垂れ流している。

（最悪の予想が的中したようですね）

ガタガタと震える兵士を見て、冷静に朱儁は分析する。

「貴方はどの陣でしたか？」

「だ、第一陣です」

どうやら最も劉備陣営に近い位置に配置した陣がやられたようだ。正直甘く見ていた。まさか最も近い陣がやられるとは。おまけに速い。そして、これから第一陣へと波才軍は攻撃を開始するだろう。第一陣が壊滅すればもう朱儁軍は破滅だ。

成程、大体解った。

そう返して、朱儁は踵を返そうとする。その後ろ姿に負傷兵が眼を大きく見開く。

傷口にきつくる布を巻かれ、付き添う近衛の兵の馬の後ろに乗せられながら驚くように声を投げた。

「何、問題ありません。元々その為に出向いたのです。ただ、休息が少し縮まった程度」

丁度その時、林を静かに駆け降りてくる人影が。向けた背を、再び戻した。流石、と口角を上げた。

渡りに船と云うよりは用意周到なのだろう。判断が早い。

「朱儁様。我ら劉備配下、出撃可能です」

「そのよつで。我々は

「

はつ、とその義勇兵は敬礼して、下がる。

その背を見送つて、木々から木の葉が舞い落ちるのを見つめる。

さあて、と岩鏡は頬を両手で張つた。

乾いた音が響いて、馬に鞭打つた。

「桃香様、どうやら予感は的中したようですね」

「そうだね、愛紗ちゃん。出陣の用意は出来てる?」

「無論です。いつでも出来ます」

暗闇に呼ばれて陣屋から出た桃香は、夥しい煙の臭いを感じていた。

愛馬の手入れをし終えた愛紗も、同様に崖下を見下ろしている。鼻腔を擦る灰色の煙が何ともむず痒い。

彼女たちが立てた予想は至極簡単なものだった。

話を聞いている間に考えた。と云うよりも真逆、直感だった。

波才は、機を見るに敏、情報戦に余念の無い英傑。

ならば、朱儁が席を外したその隙を見逃すはずがない。

朱儁も中々の將軍であるから、細心の注意は払ったのだろう」とは疑いようもないが、ただそれが波才に一步及ばなかつただけ。

此処からは未知の領域。此処から向こうは、自分と同じ思いを持つ筈の英雄との舞踏会。

踏み込む勇気はある。あると、桃香は思つてゐる。

右手に握る靖王伝家に力が籠る。左手に握る空気が生温い。その生温い空気が、出来るのかと試す様に、己の全身を舐め上げる。背筋に冷たい汗が伝つ。

奥歯を噛み締めて、震える心の中の自分を端に追い遣つて、勇み立つ自分を表舞台に。

「さて、と。じゃあ行こうか。助けを求める、死地へ」

「そうですね。桃香様には、指一本、触れさせは致しません」

そう言えば、昔よりも愛紗は落ち着きを手に入れた。

あの瞳のように、彼女は静かな水面の如くに。

（それも貴方の影響なのかな、軍さん）

彼が齎したものは、桃香にも愛紗にも鈴々にも大きい。再び見える時、あの白銀の殺意が色めき立つ時、その背中を見れているのだろうか。

敵になつたらと思つと、そつとしないが、不思議とそつはならない気がしてた。

「轔重は近隣村へ避難。放つた斥候も帰還。準備が整つたのだ」

考えに耽る桃香の左に、鈴々が立つた。馬は嘶き、呼吸は安定している。

隣には、桃香の愛馬。毛並み鮮やかな馬だ。

おかげり、お疲れ、と姉貴分一人から劳われ、鈴々も満更ではなあそうだ。

「朱儕様は、大きく迂回し第三陣と合流する模様です。劉備様「やつぱりこの煙は第一陣から上がってるんだね。こっちに来ないかな?」

「既に陣の位置は看破されているようですが、一〇〇を攻める代償はでかいでしょう。ならば自動的に第一陣に矛先が向くのは必然」「つまり、挾撃策、なんだね」

そう言つ桃香の表情は暗い。

「如何なされました? 桃香様」

「岩鏡さんは、將軍だから当たり前なんだけれどね……」

「第一陣を見捨てるのが、忍びないと?」

「うん……」

「桃香姉ちゃんは優しすぎるのだ」

「解つてゐる、解つてゐるよ……」

俯くその姿は、慈悲か優しさか、それとも傲慢か、甘さか。どう応えることも出来ず、何とも言い難いその空氣に、煙たい風がどぐろを巻く。

時刻は一刻一刻と迫る。

桃香は、袖で田元を擦つて、きっと前を見据える。光る水粒は、恐らく煙の性だろう。

『桃香』と云つ少女の想いは不要。

今からは、『劉備玄徳』だ。

兵たちに向き直り、微笑みかけた。

「さあ行くよ。刹那さえも惜しいからね」

「皆、全速全身だ。疾風よりも早く駆けよ。木々など、我らには何

の障害にも成り得ない
「気張つて行くのだ！」

第六葉 超えべき壁（前書き）

展開も更新も遅くてすみません。

第六葉……超えべき壁

桃香達が闇夜のじじまを乱すことなく駆け抜け、朱儁軍第一陣営に到着した頃には、少しばかり東の空に朝日が差し込み始めていた。否、正しくは、朱儁第一陣営『跡地』だろうか。

一瞬、其処が朱儁から言われた場所かと疑うほどに、其処には何もなかった。

残っているのは、地面に既に乾いてこびり付いた血潮と折れた朱儁の牙門旗程度。

愛紗は唸り声を上げた。

「どうやら波才とやらは兵法にも通じてゐるようですね

辺りを見渡しながら、桃香は柔軟なだけではないその眼を細めた。此処に陣を張らせたくないのだろう。休憩出来ぬのは騎馬にとつては致命的だ。

黎明を迎えたとは言え、未だ辺りは暗い。ちょっとした暗がりは未だ深淵の闇だ。進めば罠に嵌まり、後退すれば挾撃策に間に合わなくなる。ここに伏せて奇襲を狙っている可能性も在り得る。下手に動けば自らの首を絞める羽目になってしまつ。

「やり手なのだ」

「そうだね。こういう時、どうすればいいのかな？」

「最善は、此処で警戒しつつの小休止。と云つよりも、それより打つ手がないのですけどもね」

桃香は振り返つて、兵たちの顔を見た。

赤くも無く、蒼くも無く。

つまり、それは正常・冷静。過度に緊張する事も無く、過度にだらけることもなく。

これが、兵の状態に於いて一番、肝要なことである事を桃香は朧げながらも認識していた。

「流石に、指揮官無しとは云え、そう簡単には第一陣が陥落する事も無いでしょ?」「う

「それを信じるしかないのだ」

そこで暗がりから一人、兵が寄つて来て耳打ちした。愛紗は丁度いい、と囁つた。

鈴々が蛇矛を肩に乗せて、首を傾げる。

「第一陣は近隣村と結託し、濠を作つて、籠城を開始したようです。良くその村も許したのだ。波才はこの辺では英雄のはずなのに、」

なのだ

「それと同じくらい朱雠軍も英雄なんだよ、きっと。それに官軍が鬼気迫る表情で頼んできたら、断れないだろ?」しね

「そうですね」

「それにしても籠城があ。考えたねえ」

「少数で多数を相手するにはそれぐらいしかないですからね。指揮

官も無知では無いということでしょう」

「いや、この迅速さで籠城を開始できるなんて、優秀な部類だよ」

霞む夜明けに眼を細めて、桃香は村の方へと視線を向ける。

煙は小火程度にしか上がっていない。防戦一方ながら、首尾よく行っているようだ。

再び周囲の草場から物音が「ごそごそ」として、五人ほどの兵士が出てきた。

大分前に放つた偵察隊。

ここいらに伏兵がないこととの報告を受けた。

桃香が安堵のため息を漏らし、鈴々が少々落胆したように嘆息する。

自身も馬上から降りながら、声を張り上げて愛紗が吠えた。

「よし！ 警戒組も休憩」

その瞬間。

五人の内の一人が、大きく振りかぶった、

「死に晒せエ、関雲長！」

鈍色の凶刃が、愛紗の眼前で翻る。

「なつ！」

咄嗟の事ではあつたが、流石の愛紗。身を僅かばかり捻り、それを躊躇し、宙に跳ぶ。

闇夜越しにちらと覗いたのは、端正な顔立ちと、荒い短髪のしかし美しい金髪だった。

「貴様……何奴！」

「それとも何か、関雲長。お前は殺す相手に、一々名乗んのか？」

地面に減り込んだ斧が重々しく持ち上げられる。

持ち上がった瞬間、矛が斧に弾けて、赤い紫電が奔った。

「死ぬのはお前なのだあ ああ！」

甲高い音を立てて斧から火花が散る。

ち、と舌打ちして女は斧を手放して後退した。

顔を隠していた笠が取れた。殺氣だつた瞳が、靖王伝家を構えた桃香を怯ませる。

残りの四人が、着地の際に膝をついた女を庇うように前へ出る。

桃香が駆け寄る。荒い息を整える愛紗と五人を遮るように立つ。

「あ、愛紗ちゃん！」

「総員、総大将をお守りしろ！」

その叫び声と重なるように義勇兵の叫び声も重なった。

それを皮切りに、愛紗を庇う桃香を庇うように立ちはだかる。

「慕われてるなあ、劉玄徳」

皮肉そうに口元を歪めて吐き捨てる。

唾を吐き捨て、口元を拭う。斧を持ち上げ肩に乗せ、見下す様。

四人の表情は見えない。不動であるのに、剣呑な気配を放つている。

愛紗は奥歯を噛み締めながら、偵察に放った義勇兵の五人が殺されたこと、そして金髪の女を筆頭に、四人も只者ではないことを痛感していた。

「とは云えど、何者であれ、桃香様の命を狙つようならば。容赦はしない」

「赦さないのだ！」

鈴々が並び立つように宙返りから着地して、蛇矛を構える。

「ちつ。うぜえよ、お前ら」

「だから、どうした」

「そう言つのがうぜえ。そのくそったれな忠誠心もうぜえ。お前が俺の前に立つてこるものうぜえよ」

捲し立てる。端正な顔が乱暴に歪む。義勇兵の中から、怯えた悲鳴が上がった。

「おい、お前ら」

視線を前方四人へと向け、

「何儀は残れ。他は退いてる。あいつらとお前らじやあ、相手にもならねえ」

不遜な物言いだが、三人は頷いて下がった。

何儀、と呼ばれた最も背の高い藤色の髪の女は細長い、幾つも束ねた只の鉄針を握る。金髪の女は片手に斧、片手に短剣を携える。獅子の様な獰猛な瞳に見据えられ、義勇兵達が恐怖に身を固めるのが空氣を伝つ。

桃香は下がつて、と小さく呟く。

対峙する三人とは対照的に、総員、縛れる足を堪えながら慌てて馬に乗る。

「鈴々ちゃん、先に向かって。彼女達は私達がやるから」

「……。解った、譲るのだ」

「ならば、私は斧の方の相手を」

偃月刀の切つ先を金髪へ向け、愛紗が桃香から離れる。桃香の手には金色に煌めく剣。

鈴々は持ち前の軽さで畠を翻り、馬に飛び乗る。馬は上半身を身を反らす。

一つ嘶いて、駆けだす。それに数千騎続く。

橙の陽が東の空から天壤へと向かう。

一つ眼を閉じて息を吐く。また吸って、凛とした、殺伐とした荒野を見据える瞳。

その眼には踏み越えべき針山。黄色の赤絨毯の先へと。

一つ風を裂き、偃月刀が唸りを上げた。黒髪が風を纏つて靡く。金色を塗りつぶす漆黒。

「何儀、さん。逝くよ、此処からは死地だから。覚悟して」

「……義勇軍大将・劉備玄徳。その眼は、私を越える?」

「もう一度訊ねよう。貴様の名は

「いいぜ。俺の名は徐公明。お前を殺すんだ」

第七葉……懸しむと渦り（前輪や）

少し文が「トホヤ、トホヤ」になってしまった気がしております。

第七葉……悲しみと過ち

「はあつー。」

剣閃一閃。桃香の緩慢そうな豊かな身体とは裏腹に、瞳に宿る堅固な意志のよう、その戟は鋭く迷いが無かった。

何儀は両手の針の束で剣戟を往なしていく。

しかし、鶯鳥の如き猛攻は大気をも切り裂く様。藤色の髪がはらはらと数本宙に舞つ。

「その眼に、一転の曇りもない？」

「どうだと思つ? 私は迷つてないよ。貴女を超えていくよ」

頬から滴る深紅の粒を指で掬いとつて、何儀は無表情にそれを見つめる。

桃香の剣閃は全てかわしている。しかし確かに、つづくと云つ。

何儀が幾月も前に聞いた情報とは、大きく齟齬がある。

(「このままでは、苛烈に生きてきた自分が負ける?」)

「まさか、まさか」

(あの日、私は出逢つた。白銀の王者に、楓の主に?)

白銀の男に見込まれた自分が負けるなど、矜持に懸けて「己」が赦さない。

「己の矜持? 違つ、これは彼への崇拜にも似た童子の様な憧憬。

「貴女には、負ける訳にはいかない…………」

「奇遇だね。私も、そう思つてるよー。」

何儀が右手の針を構えて、素早く懷へ入る。桃香はそれを宝剣で受け、流れる様に右へ振るう。

後続の針を繰り出す機会を失つて、そのまま舞踏を踏むように半回転した。

正に空回り。自嘲的に眩いて、何儀は「」の笠を取つた。

そして額を晒す様に巻かれた黄巾を投げ捨てる。

動搖を誘う為では無かつたが、桃香は瞠目した。彼女の瞳の焰は黄から紅に。

瞠目したのは正に、彷彿した楓の葉であつた故。

「、足りない、モノ、見つけた。見つけたよ？ 御願い見てて、羌

楓様」

「！」

「負けるわけにはいかない、これが決意？」

「……」

脳裏に逆巻くは只一人の想い人。

風格は始皇帝。古代の楽毅の如き武勇。白起の如き冷徹さ。

出会えたのは奇跡。あの白銀の瞳は、何儀、否、藤を惹きつけてやまなかつた。

「霸ツ！」

身体を捻つて、生まれたのは爆発力。

勢いを伴つて投擲された一本の針。桃香の正鶴を射ぬかんと意志する。

手から離れて、真つ直ぐ加速する。

桃香はそれを、ただ難いで弾いた。

「そうだね。でもね」

「無垢な、しかし得体の知れない口元の笑み。
「軍様は私にも教えてくれたんだよ。だから、私はもつと、意志するの。しなくちゃならない」

桃香も、藤も、この緊張が何を意味するのかを理解していた。張りつめた緊張の糸が解れ撓み、自然と視線が交錯した。

此処にあるのは、己と彼。
此処にあるのは、思慕と憧憬。
此処にあるのは、女と女。

視線が交差して後、二人に奔つたのは熾烈な一閃。無形の感情の拮抗、それは大きな渦と成りて。

風が吹き荒れた。楓が薫る。
歓喜に震えて。これで又一つ。

大きく風が逆巻いた。
仕えべき主君が巻き込まれたのを見て、愛紗の心の臓が大きく跳ねた。

「桃香様！」

思わず口から出た叫び声。

鬼灯の口角が、羅刹の如く吊り上がった。

斧が重く鈍く翻つて愛紗に肉薄する。

「よお、余所見してゐ暇があんのか？ 大したもんだなあ！？」

狂氣を感じさせる瞳が愛紗の精神に迫る。
攻撃が死力を感じさせる。抱いたのは純粹な恐怖。

その斧から滲む怨嗟が無性に焦燥を誘う。

脇目に桃香を追つてしまつ。

「大丈夫だよ！ 愛紗ちゃんも集中して！」

「！ 申し訳、御座いません！」

鼻が着く程の距離での鍔迫り合いの果てに、愛紗の力がまさつた。青龍がその牙を衝きたてる様に鬼灯の肩を抉る。肉が抉れて削げ落ちた。

興奮状態による無痛も消え失せ、鋭い痛みが鬼灯の体内を駆け巡つた。

声に成らない噛み殺した断末魔が零れ、噛み締めた唇からも鮮血が飛散する。

端正な顔が苦痛に歪む。しかしその表情から臆病は読み取れず。

氣息奄々と肩で息をする鬼灯。

視界も朧げに霞んでいる。血を失い過ぎた、鬼灯は嘔く。

荒地の地面に、ぽたぽた、と赤く滲む。

「ちつ、くしょう。畜生め。痛えじやねえかよ」

「それで痛くなれば既に人でなく」

炸裂した斧の刃が頬を掠め、生臭い臭いが鼻を劈く。

それを下で舐めとる。血を振り払い、偃月刀を廻せば何かが触れるのを感じた。

楓。

「！ これは……！」

瞳に宿る凜とした漆黒の双眸に、湿り気が帯び始めた。手にとつて、懐かしむよつこ、親しむよつこ、焦がれるよつこその葉を軽く食む。

慈しむ聖母の頬笑みと娼婦のような妖しい笑みを縦い交ぜにして、口元が緩む。

憤。牙を剥いた。

「巫山戯てんじやねえぞ手前らー！」

肩が震える。斧を握る事も覚束ない手に、血がドクンとなだれ込んだ。

血管が浮き出て、眼が血走る。

「ぞつけんじやねえぞ！ 僕の『叶えたい夢』は、てめえらの恋慕如きに殺されるのかよ！」

発狂するように叫ぶ。

「手前の目ん玉は只の生娘だ！ 大層な名目で人を殺しておいて、

拳句てめえらは男の尻追っかけてくるだけじゃねえか！」

空気が止まって、全ての視線が鬼灯に注がれた。

鬼の灯。鬼の焰。

血涙の慟哭が響いた。

愛紗の表情が緊張に凝り固まった。視界の端に映った桃香の静かな双眸はどうやら揺れてすららない。しかしどうでもいい。肩の傷を抑えながら、只只管に我武者羅に叫ぶ。

怒り猛り憤るその脳裏には、嘗ての『英雄』の姿がある。

しかしその視線の先に自分は居ない。

鬼灯は、こっちを見てくれ、決死に叫ぶ。

愛紗の驚いた眼が見据えるが構わず、涙が零れた。

愛紗からも又、涙が伝つた。

獅子の慟哭。

愛紗は己の手を見つめる。その手が薄汚れている気がして成らなかつた。

第八葉　　夢る想いと思い（前書き）

タグにもつけちゃつたけどキャラ増え杉。

今度キャラ紹介載せますね。

第八葉……募る想いと思い

幽州へと続く街道をよろよろと『義』を掲げた旗が立ち並ぶ。からりと乾いた風が一団を掠めた。その頬は齧れかけている。輪重を回収してから、もう一月も練り歩いている。

鬼灯が膝をついて亡骸のように表情を喪つて倒れかけると、それを助けるように藤がそれを支える。

結果的に見れば、義勇軍には首級を上げることもできなかつたが、藤と云う同胞が増えた。

が。

朱儁軍は壊滅状態だつた。

遅陣によつて挾撃は為されず、第一陣・第二陣は野戦にて敗走し大損害。

村は大きな被害を受けていなかつたのは朱儁軍の計らいなのは間違えようもない。

桃香と愛紗が到着した頃には疾うに波才軍は見事に姿を眩ませていた。

岩鏡は沈痛な面持ちで、桃香と愛紗に、

「合流まで持ちこたえられず、誠に遺憾です。申し訳御座いません」と深々と頭を下げるのだった。

更に言えば鈴々率いる騎馬隊も伏兵と奇襲を受け疲弊しきつて、総勢の三分の一を喪つた。

つまり、大敗北を喫した。

朱儁軍は一旦都へ帰還し、皇甫嵩の軍と合流するらしい。

愛紗は己が手を見つめる。

己に投げかけられた、鬼灯の叫びが揺さぶりをかけてくる。

只の少女の眼。

桃香は軍の云つた、足りない、ものを掴んだようで、迷うような色が見えない。

『叶えたい夢』。それが徐晃の、足りない、ものだつたのだろう。

それを与えたくれた『波才』の消失。残つたのは想いの残滓。恋慕の先は何処へ。

もし自分がそつだつたらと考えると辟易してしまう。

はう、と切なげな溜息が胸から溢れだした。

所詮、自分はこの程度なのか。思慕の情だけを望んでいるのか。

視線を後ろへ投げかければ、憔悴した兵たちが見える。

未だ城までは遠い。

その事実が、疲労に追い打ちをかけるのだろう。

以前なら率先して慰撫をしたのだろうが、そんな余力が無い。

胸の奥が、しこりが、重い。

ふと、藤と視線があつた。

吸い込まれるような瞳に映つた己が、ひどく汚れている。

こんな軽い気持ちで命の駆け引きをしているとは、愚昧の極みではないか。

何かを言いたげだつたが口を噤んだ藤は針の束を背に担いでいる。

それで桃香と討ち合つた時、何を得られたのか。

聞きたが、億劫だ。倦怠感と怠惰が、大きく圧し掛かる。

こんな気持ちが厄介で邪魔だ。

早く軍様にお逢いしたい。でも、こんな半端な気持

ちじや駄目なんだろ？……な。

幽鬱は未だ続いている。

同時刻。

街道から少し逸れた獸道。

そこを、一人の剣を携えた女が身軽氣に岩場を超えていく。

蜿蜒長蛇の列を成して行軍する一つの隊を見つけた。

『義』の旗がはためく一団は、何處か茶色に霞んでいる。

「是。僭越ながら発見致しました次第」

その声は厳格さを含んでいる。

女は一見すると男のようだ。

背丈も高く、処女雪の如き白髪の髪は乱暴に短く切り揃えられて
いる。言葉で云うなら男装の麗人。鼻も高く、全体的に整い過ぎて
いる印象を受ける。

男よりも女からの人気が出そうな風貌。

彼女の名は、徐庶。

第一陣で指揮を取っていた者。敗走したとは言え、腕は確かである。

水鏡の元を発つてから、仕えべき主君を探す為に流浪を繰り返し、
その一環として従軍していたに過ぎない。彼女自身、もう時期が來
たと思っていた。

一兵卒としての能力も高く、兵法にも通じている。
野放しにするには惜しい人材であると云えた。

真名は雪柳。

彼女もまた、楓の元に馳せ参じ集う者の一人。

第6話……姫は睡る、やがて進む。 (前編)

つまりキャラ紹介。

・ 目安

武力：（正史）呂布を100として。
軍略：（正史）賈？を100として。
知力：（正史）周瑜を100として。
統率：（正史）曹操を100として。
政治：（正史）諸葛亮を100として。
馬術：（正史）呂布を100として。

第6話……姫は踊る、されど進まず。

・羌楓軍（蚩尤）（幽樹）

背丈：約185cm

武力：105

軍略：92

知力：86

統率：87

政治：80

馬術：105

概要：色白。てか蒼白。銀縁眼鏡に朱色の髪、190cmもの長身の持ち主。

インテリ武将。実は蚩尤。得物は両刃の刀で、爪は鉄でできてる。

今作の、未だ出てないけど主人公。実は2度生き返っている。

劉邦　　李と恋仲だった。

第零葉に於いてこの時代に墮ちる。

「私は～です」

・波才【字無し】（真名は未だ無い）

背丈：178cm

武力：73

軍略：81

知力：52

統率：89

政治：49

馬術：79

概要：鬼灯の嫁。眼の下に赤い隈どりのよつた化粧。顎にはチリ

9月号

チリ毛が眩しい。

元々は『英雄』。しかし某3人姉妹と音信途絶えてただの根暗鬱お兄さんに。

原始黄巾党の指導者。因みに名前は作者の捏造です。作中では『原始黄巾党』と『黄巾賊』と云々風に区別しています。

「我」なのだ

・朱儁公偉（岩鏡）
背丈：165cm

武力：62

軍略：80

知力：78

統率：82

政治：56

馬術：76

概要：官軍のバランサー。皇甫嵩と一枚看板。

三国志正史で、波才に敗北を喫している。

個人的なイメージとしては、天然おつとりお姉さん系。普

乳。

眼鏡つ娘。黒髪だけど愛紗のような美しさにござしい。苦労性で枝毛もちらほら。

儉約家で、鎧や兜は機能美を重視。兵法よりも実践を重視。個人的な武よりも大軍を指揮する指揮官。

「私は（わたくし）で御座います」

・徐晃公明（鬼灯）

背丈：169cm

武力：92

軍略：75

知力：71

統率：93

政治：62

馬術：87

概要：初期のキャラとしては強キャラ。正史を考慮してのこのステータスですから。

金髪短髪。動物で警えるならライオンでしょうか。

斧と短剣の使い手。おっぱいは大きいよ。

白波賊をしていた時に波才から勧誘されて波才に惹かれる。波才ラブ。今後をどうするかは謎。

「俺～だぜ」

・何儀【字無し】（藤）

背丈：173cm

武力：81

軍略：52

知力：53

統率：38

政治：37

馬術：76

概要：初期設定では死ぬはずだったのに。何故か仲間にいる歩兵部隊の副将。

語尾に「？」と付けるキャラ。私自身書いていて、凄く使い難いであろうと思ふキャラ。

紫の髪に紫の瞳に無表情。おっぱいは美乳。

得物は針。細長い針を束ねてぶんぶん振りまわす。

軍大好きっ娘。自己満足の臭いがプンプンするキャラその？。

「私～だよ？」

・徐庶元直（雪柳）
背丈：175cm

武力	83
軍略	90
知力	90
統率	79
政治	80
馬術	80
概要	数値化してみて解ったよ。こいつはバグキャラだ。

白銀の髪。雰囲気は氷。無表情と云うよりもクール。
ノッポ女の多い今作でも群を抜いてノッポ。しかし微乳。

正史に基づいて武器は剣。知力が高いのは諸葛公明と同門
だから。強いのは仕様。

男装の麗人。俺的男の娘。……え？意味が違う？

自己満足の臭いがプンプンするキャラその？。

「此の柳）で御座います」

じゃあ、目安的に既存キャラの数値をば。

・劉備玄徳（桃香）
背丈：163cm

武力	79
軍略	66
知力	78
統率	89
政治	77
馬術	81

・關羽雲長（愛紗）

背丈：167cm

武力：94

軍略：85

知力：83

統率：85

政治：71

馬術：90

・張飛翼徳（鈴々）

背丈：153cm

武力：91

軍略：30

知力：45

統率：85

政治：23

馬術：90

・趙雲子龍（星）

背丈：165cm

武力：91

軍略：86

知力：85

統率：86

政治：73

馬術：88

彼女達は伸び代がありますので、まだまだ強くなるはず。
原作キャラの概要が無いのはご容赦ください。
今後もキャラ設定は載せていきますね。

これからもどうか宜しくお願いします。

第闇語…………姫は睡ぬ、やれど進まぬ。（後醍醐）

感想をお待ちしております。

第九葉 蟻りの宴（前書き）

そろそろいちやらぶが書きたいこの頃

第九葉……蟠りの宴

「ようこそ来てくれた、桃香」

「久しぶりだね白蓮ちゃん」

再会を祝して抱きあつ一人を尻目に、藤は辺りを見まわした。

質素な造りの城だ。此処に至るまでの道程まで、昨今の不況にしては顔色の良い農民の姿が目立つた。国庫を割いて農民の生活向上を努めているのならば、大した仁君だ。

しかし彼女自身から感じる雰囲気に、悪こそ感じないのだが取り分け多くの仁を感じるわけでは無かつた。戦士としての希薄も乏しい。と云えど弱そうにも感じられない。良くも悪くも普通か。仮に彼女がそれを抑えてその程度にしか感じさせていないのだとすれば、とんだ役者。それはもう人跡未踏の領域の実力者だ。

「客将として迎え入れるよ、最近一人増えたとはいえ、未だ未だ人手が足りなくて困っていたんだ」

「ありがとう！ 助かるよ白蓮ちゃん」

藤が見回している間に、話が纏まっていた。

公孫？の手と桃香の手とが結ばれた。双方に安堵の笑み。理由を推測するのは容易かつた。

……玉座の左右に立つ太い石の柱、後方に列を成して並ぶ柱の数々。

設計者は高い美的感覚を持っていたに違いない。

藤

脇に控えた針がずれて硬い音が鳴った。

帯刀を許されたのは桃香がこの公孫の同門であったかららしい。
藤は力強く針を握り締めた。

丁度その時、より強い闘志を感じた。
気を張り詰めていたのは藤だけではなく、愛紗も同じだったようだ。

彼女の眉は顰められたままの斜め。

「桃香様」

「何？ 愛紗ちゃん」

「発言を御許し下さい」

偃月刀が重い音を立てる。

その固い物腰に、桃香も顔を引き締めた。

首を傾げる公孫？を睨みつけながら、愛紗は声を荒げた。

視線は真っ直ぐ柱に。

「そこに隠れている二人、神妙に出るー さもなくば

「おや、ばれていたのですな、雪柳？」

「此の柳、不覚」

現れたのは二人の女性。

左は白銀の処女雪を彷彿させる白髪^{はくはつ}の長身の女と、右は短く丁寧に切り揃えられた淡い水色の髪の女だった。

左は知性と威厳。右は妖艶と霸氣。

絵になる程に様になつていてる。

只者ではない事が、空氣を伝つて肌に痺れた。

「ああ……失礼だらう、子龍、元直」

そこで気付いた様に、

「済まない。彼女達は私の客将をしてもらつてゐるんだ」

何處か自慢げに、公孫?は胸を張つた。小さくも大きくもない胸が揺れた。

「お初にお目にかかる。白蓮殿の客将をしていふ、趙雲子龍と申す者。真名は星」

「同じく、徐庶元直、真名を雪柳。御会いできて恐悦至極に存じます」

悪びれる風も無く一人は頭を下げる。

一人の後ろに構える様に、玉座に公孫?は腰かけた。腕を組む。

「私は公孫?伯珪。真名を白蓮だ。改めて宜しくな」

冬を目前に控える庭園は、寂しげで。
透き通つた池の水。朽ちて葉を落とした木々。
茶褐色に覆われた世界。

望郷の寂しさで胸が詰まりそうになる景色の中、六人は枯れ葉を踏みしめた。

藤、桃香、愛紗。白蓮、星、雪柳。

そして巨木の下に円を描くように座り込んだ。

静寂。沈黙。やがて白蓮が白い息を吐いた。

「「」はな桃香、私たちの想い出の場所なんだ」

手を伸ばして、愛おしそうに樹の肌を撫でる。その頬は微かに朱に染まっている。杯を呷る。

酒を湛えた盃を、星へと手渡す。

愛紗は、薄ら寒い感覚が口の中に再び吹いたのを感じた。

星は一口呑んで、桃香へと繋げた。

「「」の樹は楓の樹。此処で、「」の乱世で戦い続けなばならぬ目的を見つけたのです。　　嗚呼、今すぐにでも激しく抱いて、欲しいくらいに焦がれているのに」

「なんだ。　　私にとつても……私たちにとつても……思入れが多いんだよ」

そう言って、星は小さな口づけを、降ってきた楓の葉に落した。蕩けるような、陶酔のだらしのない笑みを星は浮かべている。

桃香もその杯を雪柳へと渡す。水面には恋する瞳が映り続いている。

受け取り手は僅かに震えている。それは寒さか温かさか。身体は熱いはずなのに。

「此の柳も、ここに聖上と出逢つたので御座います。生涯仕えべき御方であると、この未熟な心の臓の奥が、震え疼いたのです」

頬を染めてその端正な顔を苦しげに歪める。心服して止まぬ主君と云つよりも、桃香や星のそれと同じで。

藤も、瞳を濡らして虚空へと言の葉を漏らした。

雪柳から藤が受け取つた。

警えようもない心醉。皆よりも、余りにも強すぎる想い。

「私が、賊に墮ちた時、助けてくれた……。だから、恩は必ず返す。当然？…………当然」

それは彼女自身の決意か。

凛とした瞳は、想いを固めたようでもあり。

愛紗の手に渡つた。

しかし桃色の空氣の中で一人、蒼く口を開ざしていく。
ぽつり、と口から想いが零れた。それは水面に墮ちる滴のようだ。

「　　波才を思い慕いながらも世を憂う獅子に、言われた事があるのです」

妙な言い回しだったが、それは愛紗の心情の率直な吐露。

愛紗の瞳には何者も映つていない。

秘められた虚無。黙つて皆、その言葉の先が紡がれるのを待つた。

「思慕の情だけで、人々の意志を呑み食ひうるのか、と」

独白。懺悔にも似て。

「只の小娘の眼でしかない、と」

恐る恐る言葉が紡がれていく、

「、足りない、ものがなにか、解らないのです。手の中から、すり抜ける様に、解らないのです」

苦しみ。喉の奥が搔き書きたくなるような、
言葉が堰切つたように溢れ出た。

「私には逢う資格がないのではないか、と思つてしまつて」「苦しい。苦しい。どうすれば、この思いが解けるのでしょうか」「私は資格が無いのかも」

「

涙が、涙が。伝う。頬を、乾いた肌の上を。

その頬を、誰かが拭つた。

「失礼。人を想うのに、資格など必要なので御座いますか?」

「え?」

「そんな大仰なものではない筈です。世の中で最も価値があり、最も価値が無いとも言える『愛』は、此の柳にとつては最優先。聖上は、それほどの御方だと愚考致しております」

饒舌に話しへ始めた雪柳に皆の視線が攢蹙する。

「敢えて言うなら、只の嫉妬でしかない。かの獅子は、天下と想い人を天秤にかけて、想い人を想い過ぎる余りに天下の民を選んでし

「また」

怜俐な光が煌めいた。

「この大陸の無辜の民と、想い人を秤に掛けでどちらを選ぼうがその人の勝手。確かにそれは余りに龐大な命を預かる王としては失格かもしませんが、貴女は現状、王ではなし。やがて仁君に従いその御心に従えばそれは必然、民を救うでしょう。さて、貴女がただ只管に『想い人』を想うことに何の問題がありますか？」

その透明で澄んだ瞳を愛紗は見つめる。その瞳を覗き込んだ。

「彼女は、正念場の時に、愛紗殿の均衡を保つていた天秤が『想い人』に傾いたことに瞋恚を感じたのでしょうか。己に無かつたものを貴女が持ち得ていてる故に」

「だから貴女が深く氣負う必要はないのではないか？」必
要なのは『愛』。『想い人』と仲間を一に、民を一に考えるだけで、
その『決意』を己の柱にすれば、「足りない」ものを嘆く事もなく、
獅子に揺らぐこともない、と僭越ながらに思います」

一つ深く雪柳は、長々と申し訳無い、と頭を下げた。

皆眼を大きく瞠目した。それは一重に愛紗の暗がりが晴れた事に
起因する。

明確に『決意』を意志をして下さい。

……その言葉は誰のものか。

美しい花々。
美しい」とよ。

楽しそうに咲る六人の姿が上から見える。
風に揺らめいて、髪が靡く。
それは朱色。
もう少しで、と嘯いた。

第十葉……それは想い出の中へ（前書き）

劉邦季。

彼女の真名は『李』。

蚩尤と出逢つて、交換した真名は『幽華』と『幽樹』。

第十葉……それは想い出の中に

冬へと向かつ冷氣は、巨木をも蝕む。

樹の幹に腰を掛け、杯を傾ける。

粉雪舞う宵闇の帳の中は、酒がよく身体に沁み渡る。

水面の上を無垢な白が無邪気に踊つていて。

手に取る雪が溶けてひんやりと冷たい。

熱燐の湯氣が眼鏡を曇らせた。白い吐息が誘つのは幾許の寂しさ。その揺れた水鏡に映る曇つた顔が、困った様に歪んだ。

感覚と心の、二つの世界。

表の世界では自分を慕つてくれている数人の、楽しげな少女達の姿が見える。

そこの中に入るべきは、『軍』。

裏の世界では只一人、一人だけの、微笑む李 幽華 の姿。

そして、其処には『幽樹』が、居た。

向こうに眼を呉れる……北京の町並みは軒並み静かだ。瞼を閉じた

瞳を開く。

心の中の一つが、交わることなく私の心を締め上げていく。

右目の奥の幽華。

左目の奥の桃香。

『愛してるんだ、幽樹。幽華たる私だけの、幽樹』

耳に残るその声が、未だ頭の中で渦巻いている。

(私にとって、彼女は全てだった)

その声。その肌。その温もり。その唇。その柔らかさ。

餓えた己が彼女の身体を求める。

私は蚩尤。神代の世界に生まれ落ち、殺された。

私は軍。時を経て、生き返った。幽華の側に。

こんな私を側に置いてくれた幽華。

李と云う真名と、私だけの為の『幽華』と云う真名。
身体の奥で、心の奥で触れ合つて、血潮の上で戦つた唯一無一の
片腕。相棒。伴侶。

だけど。

そして運命の最後の日。

項羽を打ち倒して、手に入れたのは、斃れた彼女と、色褪せた世
界。

此の手に残る感触は、千年の時の中では拭い取れはしなかつた。
消えていく温かさが、訪れる冷たさが、抜けていく身体の力が、
未だに、未練がましく、此の手の平から取れない。

李。……幽華。

失つてからずっと、涙が枯れない。

私は、何をすれば……

答えなら、すぐ側に在ったことに気付く。

視線を下ろした。

其処には、六人の少女達。

黒色、紫色、白色、水色、赤色、そして桃色。

想いと想いの狭間に揺れる少女。

一途で従順な、救われた少女。

目指すべき目標を与えられた少女。

共に歩みたい、側に居たいと望む少女。

非凡を求める少女。

そして、非力を嘆く少女。

劉備玄徳。

劉、の血を継ぐ少女。

桃色の、慕つてくれている筈の少女。

「これは運命なのでしょうね……幽華？」

やはり、と軍は空を仰ぐ。

透き通つた透明な冷たい空気が肌を刺す。

その微笑む姿が、眩しく、また愛おしくも感じる。

（そう、ですね）

答
えな
うす
ぐ側
に。

第十葉……それは想い出の中に（後書き）

『山海經』によると、蚩尤は、黃帝に反旗を翻した旧・天神の豪族であり、八十人の兄弟が居たそうで御座います。

勇敢で辛抱強く、風や濃霧や煙、雨を巻き起こし、砂鉄や砂利を食らい、皮膚は鉄よりも堅い。化物と呼んでも遜色のない人物がありました。

『路史』によると姓は『羌』。

彼が黃帝との戦争に敗れると、逃げぬようにと嵌められた厳重な枷は、死に耐える蚩尤の血で真っ赤に染まり、怨嗟で幾重にも覆われた楓の葉になつた伝えられています。

五兵を編み出した兵神としても名高い彼ですが、彼の名は、凶兆を顯す星や真っ赤な楓の葉が描かれた旗『蚩尤旗』でもその名を大陸に知らしめています。

そして、その『蚩尤旗』を軍旗として掲げたのが、何を隠そ
う、高祖たる劉邦なので、御座いますよ。

実は、桃香は、軍の血を引いていません。

つまり?

第十一葉 「おやすみ」（前書き）

短いですけども……。

主人公格の桃香さんのターン。

9/26.....修正。「馬元義」な訳がない。人選適当過ぎた事に今気付きました。
結果：「馬元義」から「管亥」に。

9/28.....修正。こんな大軍勢ありえねえ。
結果：「二十万」から「十万」に。

第十一葉 「おやすみ」

冬も中頃。また草木の枯れ逝く季節が来た。

桃の花を落した白湯で喉を鳴らして、凍てつく身体を温める。次の秋には再会できるものと信じて、桃香は準備を急ぐ。態勢として、先ず幽州の白蓮と一時的に共同戦線を張る。ほぼ同等の権限を烏滸ましいと知りながらも許可を得た。彼女自身も軍と共に歩みたいと望んでいるから問題は無いだろう。

合わせれば大規模な軍勢になるのは確実。それについては、軍師は雪柳、兵長を愛紗と鈴々、その補佐に藤。騎馬を白蓮と星。大将を桃香とすると決定した。そして可能ならば、軍に助力を乞う。これは満場一致であったのは特筆しない。

以下、波才の問題もある。

近況はと云えど、岩鏡曰く、冀州北部に潜伏していた原始黄巾党は敗戦一色だつた黄巾賊の張曼世と管亥の軍勢と合流し、十万強の大軍勢に膨れ上がつた、と。また、張角・張梁・張宝が曹操軍に討ち取られたこと。皇甫嵩と曹操と連携して、次は一の轍は踏まぬと意気込んで、再度協力を要請してきたこと。……最後に軍師の損失の嫌味は忘れていたが。

皇甫嵩の計略の都合で決まつた、冬下旬の作戦開始まで時間は短い。

国力の増強と兵力の増強を同時進行せねばならない状況下。適材適所より、練兵や警邏は武官寄りの愛紗や鈴々や星が担当して、藤や雪柳、廬植門下だつた白蓮と桃香は書類仕事に追われていた。蠟燭の幽かな光が淡く筆先を照らす中。

桃香は走らせていた筆を止めて、ふうと一息ついた。

手が痺れるほどではないが、これ以上酷使すれば明日の作業に支障をきたすと悟つて、寝台の上に身を落とした。

「今、どこに居るのかな……」

じつ頭も身体も使わない時間になると、じつしても思考がそひりへと向いてしまう。

謎めいた風貌、冷めた視線、携えた長剣。総じて不明だった。

しかし、感じるのは郷愁。何と言えばいいのか、それは大昔の恋慕？

血が疼くのが止まない。

淡く甘い灯が艶めく肌を照らした。どことなく悲しげな灯りと窓から差し込む優しげな三日月の明かり。

甘く酸っぱい思考が頭に渦巻いた。

布団に顔を埋めて、いやいやと左右に揺らす。

ほわん、と蕩けた桃香は起き上がりつて蠅燭に息を吹きかける。艶めいた桃色の唇から放たれた吐息は、暗がりを呼んだ。静かに眼を瞑つて、口元をぱくぱくと動かした。

お、や、す、み。

燻ふる想い。

「おやすみ……」

第十一葉　右中郎将と左中郎将

冬も終盤に差し掛かった。空気が乾燥している。

空気が肌を刺すのは乾いているからだけではなさそうだった。幽州北京では、今朝方から、殺伐として張りつめた空気が漂っている。朱雋・皇甫嵩の来訪である。

民衆も兵隊も武将も更には王までもが緊張していた。

が。

妙に「機嫌な岩鏡は鼻唄でも唄いそうなほどで。

それはどうやら傍らに佇む彼に起因しているようだった。

彼の名は皇甫嵩。

一見すれば好青年のようだ。糸目に掛けられた黒縁の眼鏡、首の後ろで結われた縁髪、口元には消えることの無い底知れない笑み。総じて幅広く女性から人気が出そうな風貌だ。岩鏡は首つたけの様子であつたが、桃香や愛紗は皇甫嵩の終始含み笑いに、勘弁被りたいといったような様子であつた。いざ立ち会つて、愛紗は鷹の様な、猫の様な、喰えない奴と云う印象を受けた。

その喰えない男は、作り笑いを浮かべたまま握手を求めて手を差し出した。

「どーも始めてまして。朱雋君の友達の左中郎将の皇甫義真と申す者です。ふふ、波才君に散々な目に遭わされたようですね。ですがもう何の問題もありません。この義真にかかれば、波才など笑止。ご安心ください」

「…………あ、はい。どうぞよろしくお願ひします」

意外な饒舌に、拍子抜けと云つか肩透かしを受けたような気分になつた。

それはもしかしたら、飄々とした風のようでもあった。台風の様で、微風の様で、旋風の様で、まるで掴めない。

（あの腰に携えたどう見ても農業用鎌に鎌を通したものにしか見え

ない武器は……何だ）

氣取つてゐるよりも素のようにも見えてしまつ、舞台俳優さんが
らの仰々しい動きを見つめて、愛紗は怪訝そうに眉を顰める。

「ああ、何を考えてゐるのかが手に取るようになりますよ。胡散
臭いとか考へてるでしょ？ 良く解りますよその気持ち」

眼鏡を人差し指で持ち上げて愛紗をじつと見つめる。半笑いの口
を愛紗はしばき倒したくなつた。

寡黙そうに見えてまるで豪雨のように放たれる言葉の数々に一同
は辟易するばかりだつたが、その中に重要な事項を織り交ぜて話す
ために話を最後まで聞かなければならなかつた。岩鏡が申し訳なさ
そうに頭を下げて義真を連れて去るまで、それは延々と続いた訳で。
果然とした空氣の中の、

「……矢張り殿方と言つものは、冷静沈着でいて然るべきなので
しょうな」

「……子龍も偶には良いこと言つてじやないか」
といつ星の眩きは、至極真つ当だつたのかも知れない。

余談。

日暮れの町中を歩く一つの影。

岩鏡と義真は、護衛を撒いて静かになりつつある北京の町並みを
歩く。

それは初々しい恋人のようでもあり、長年連れ添つた番いのよう
でもあつた。

「……北京は、中々に良い町のようですね義真？」

「そうですねえ。あの劉備君達が来て治安や整備の日が行き届くよ
うになつたからでしょ？ ちらほら見える警邏の兵も少しずつ僕た
ちへの警戒を強めているようですし、良く調練もなされていん」
へえ、と呟く岩鏡の頭を撫でて、義真は振り返らずに後ろへ手を

振つた。

それに慌てて飛び出て敬礼する警邏を気配に感じながら、義真は歩きだす。

律義に振り返つて敬礼した岩鏡は急ぎ足で距離を縮める。

茜色の空を仰いで、彼は感慨深く岩鏡の耳元で囁いた。

「…手早く用事も済んだし、今日はゆっくり休めますね」

「…それはどういう意味ですかあ……？」

空を見上げる義真の前に回り込んで、岩鏡は上田遣いで彼を見つめる。

日差しに照らされて翳つた彼の表情にはやはり薄ら笑いが張り付いていた。

でも、岩鏡にとつてそれは温かく感じた。

「今日はゆっくり休みましょうね、岩鏡」

頭をわしわしと撫でるその温かくて安心する手を感じながら、岩

鏡はこくこくと頷いた。

旋毛に落された接吻。

温かい。これは幸せ、岩鏡は想つ。

それは恋人。

冬の短い夕暮れの中で伸びる影は寄り添つて。

夜の帳と共に燃え上がる焰は。

それはそれは熱く熱く、夜の暗幕に隠れて、静かに気炎を上げて燃え上がるようだ。

第十一葉　　中日通商と中日通商（後書き）

さひつけたよひだ。

第十二葉 治世の熊臣、乱世の奸雄（前書き）

次こそは戦闘シーンに入りたいと思おつと思つてゐる。

波才一派の出没情報を受け慌ただしく斥候が往復する幽州、北京、中央城の玉座の間。

微笑む義真や寄り添う岩鏡、緊張した白蓮と桃香、そして騎都尉の曹操が轡を並べて卓を囲んでいた。

前に岩鏡と義真が滞在していた時に話に上がった曹操。一勢力としては弱いものの指折りの実力者。無法者と無能者を悉く嫌う一面もあり、反面有能者や英雄を須く愛する。女が強いこの時代故に、女色が非常に強いらしい。

桃香はちらと件の曹操を一瞥する。

左右に侍るは、姉の夏候淳と妹の夏候淵。周囲に霸氣を撒き散らして牙を剥ぐ姉と、静かで凍てつくような視線を向ける妹。鋭利な抜き身の武器のよう、英傑二人を従える曹操の器量が窺える。そして彼女自身の驚異的な能力の高さは如何ほどか。武力も軍略も器量も霸氣も叶う気がしなかつた。

しかし夏候姉妹よりも愛紗や鈴々の方が武将としての能力が高いと思っている。それだけが臆病な桃香を逃げ出さずにさせている心の拠り所だった。

地位で云えば明らかに朱儁や皇甫嵩の方が高いのだが、曹操は慄慄無禮で高圧的だ。それを咎められる様な生半可な気迫では無く、誰も口に出さない。

寒いのに甚兵衛だけを着込んで涼しげな、しかし場違いな義真をねめつけ、曹操が口を開いた。

「で、どうするの？」

だが会議の内容など煩瑣と云わんばかりに、星や愛紗などを物色するように目を細めた。左右の熱視線は気にならないのだろうか。睨まれても悪びれることのない義真が顎に手を当てて、

「張曼成と管亥の軍勢、波才、徐晃と云う風に別れたようなので、

各地で迎え撃つ算段ですが

「皇甫嵩と朱儁、私達が波才本隊と当たる心算でいますがどうで御座いましょう?」

有無を言わさぬ光を眼鏡の奥に灯して岩鏡が引き継いだ。
「波才本隊が約五万、徐晃が二万、張曼成と管亥が三万と云つた具合なので。まあ曹操殿には張曼成と管亥あたつて頂きたい所存ですね」

文句言いたげな曹操を見据え、糸田が薄く開いた。瞳の奥の妖しい光が煌めく。その蛇の様な、凶惡な光に、桃香の皮膚が僅かに粟立つて、曹操は汗を誤魔化す様に溜息をついて押し黙つた。

「仕方ないわね。洛陽の援軍を頼ることにするわ

「是非そつして下さい。……さて、御一方も異存はありませんよね?」

「あ、ああ。敵は徐晃か……まあやれるだけはやるわ」

「そうだね。負けないよ」

垢抜けた白蓮と幼さの抜けた桃香。曹操は心中で驚嘆した。
悪くない。

「具体的な作戦は各自にお任せします。本格的にばらばらなので各個撃破望ましいんですけども、どうしても救援が欲しければ敗走する前に連絡してくださいね」

蛇の眼光は真っ直ぐ曹操に向いている。

欲しいものを見つけた時の童子のような表情が失せて、苦々しく口角を上げた。

「万が一や億が一でもあれば有難く呼ばせて頂くわ。でも、私は忙しくて救援に行けないかもしれないのよ。御免なさいね」

「そうですか。劉備殿と公孫?殿は大丈夫そうですから、そう心配してませんよ。もしもの時は、頼りにしていますよ?」

蛇と霸王の睨みあいが続く。蛇は武人二人と霸王を以つてしても揺らぐことは無い。

白蓮は一刻も早く逃げ出したかった。

「そ、そうかつ。早く次の議題はないのかつ！？」

場に渦巻く殺意や恐怖に急かされて話が進んでいく。焦り怯える
眞面目な岩鏡や白蓮を余所に激化していく水面下の鍔迫り合い。
心に一陣冷えた風が吹いた。桃香は、薄ら寒く感じた。春、その

先、その先が待ち遠しい。

もしかした義真と曹操は相性が悪いのかも知れないとか思いながら、桃香は漠然と茫然と時間が過ぎるのを待つた。隣に立つ愛紗も瞼を閉じて我関せずといった風情。

身体の寂しさと寒さが妙に、桃香を憂い静かにさせる。
秋の足音を探るように瞼を閉じる。ただ静かだった。

興味無さそうに振る舞える桃香を、曹操は不思議に思った。
(どうしたらいい今まで無頓着そうに振る舞えるのかしら？)
眠いのかどうでもいいのか。落ち着いていると言つよりも、静か。

腹黒い義真とは別の意味で、その奇妙な魅力は底はあるか全貌、更にはその表層さえ見えない。

その豪胆さ、義勇軍で終わるには余りにも惜しい。
配下に加われば、王道を敷くことも容易になることは疑いようもない。

無い。

側に立つ関羽と言つ武人も欲しい。

初めて、その主従を羨ましいと思った。

無為自然なその体裁から、隙は無い。

明鏡止水。泰然自若。

己が劣っているとは毛ほども考えられないが、質の違う器の大きさを感じる。

それを探り当てられなくて、妙に苛立つてしまった。

「話はこれまでね。早く支度を済ませる為、ここにで暇するわ」

引きとめる声は無い。

義真はやれやれと嘆息、岩鏡は慌てふためき、白蓮は安堵の嘆息。桃香は、さよなら、とだけ言つた。その無垢で虚無な瞳は何を思つているのか。

予想の範疇を逸脱している。

春蘭と秋蘭を引き連れて向かつ足取りがそこはかとなく重いのは何故だろうか。

あらゆる面で勝つっている。負けていない筈だ。

なのに、何故これほどまでに悔しいのだろうか。

(妙に腹が立つわね)

後に続く二人に視線を向ける。

何よりも愛するその才能と忠誠。心の臓が撥ねた。少し身体が疼く。

「春蘭、秋蘭。後でたっぷり可愛がつてあげるわ」
はい、と大きな声で、頬を染めて応える二人がいじらしい。
少しだけ気分が晴れて、どう可愛がるかを考える事にした。

第十三葉 治世の能臣、乱世の奸雄（後書き）

才氣迸る曹操様の「」登場です。
これから絡むはず。いろんな意味で。

第十四葉　　毒には毒を以つて制す・上（前書き）

今回は上・下構成です。

これで十四葉中に戦闘に入る約束は果たせそうだ。

右鏡・義真のターン。

第十四葉……毒には毒を以つて制す・上

顔合わせから暫し経過した晴天の日。質素で堅固な鎧に身を包んだ一団が、長社へ向け、荒野の中で駒を進めていた。

総勢四万騎。

先頭に立つのは義真。『皇』の旗と共に、その縁髪が揺れる。側に並び立つ、『朱』の旗を掲げた、岩鏡も凛と戦士然としている。良く手入れされた馬は良く懷き、自由自在に動いているようだ。器用に岩を除けながら進む岩鏡。義真は、彼もまた器用に馬を駆っていた。

岩の少ない場所を進む岩鏡とは対照的に、義真は岩と岩を縫うよう動く。

蛇行。

ため息交じりに、義真は遠くを見据えた。

馬の蹄の音に耳を傾けつつ、岩鏡は義真を横目に一瞥した。

「はてさて……。大見得を張つたは良いものの、前途多難に違いないですね」

「何せ五万で御座いますからね。これは多くの血が流れるでしょうし」

珍しく弱音を吐く義真。

岩鏡は無理もない、と思つた。五万なんて言つ大軍勢とは交戦経験がない。

激励の言葉を掛けようと、開いた口。慰めの形をして、止まった。薄く開いた眼。
その蛇の眼は、岩鏡を激しく痺れさせた。

「だから、まず小細工ですね。楽して沢山殺せるように、ね？」
振り向き様の横顔が、睥睨するような流し目が、とても恐ろしく見えた。

白い吐息が、細くじぐうを巻いて立ち上った。

「御覧よ、この兵糧を」

後ろを指差し、輜重隊の積み荷を見つめる。

岩鏡も、それに倣つた。

愉しそうな声色で、眼鏡を上げる。

「実はこれ、砒霜を含んでいるのですよ」

砒霜、というものが何かは分からなかつたが、義真の、悪童のような無邪気な笑みから察するに、物騒なものであるとこつこつと岩鏡は容易に感じとれた。

「砒霜と言つのは、非常に強い毒です」

毒、その言葉に岩鏡の顔が曇つた。

義真是、それに満足そうに頷いて応えた。

「毒には毒を以て制す。かつての英雄も、もつ見る影もなく。既にこの王朝の害悪、毒でしかないのですよ、岩鏡君」

北叟笑む義真に、躊躇いがちに、批判の音色を含ませて。恐怖を含んで応えた。

「それは、余りにも惨いのではないでしようか……」

悪辣な悪童は、嗤つた。小馬鹿にするような、見下すような、そんな。笑み。

その半眼が岩鏡には怖くてならなかつた。

「優しさですか、甘さですか？」

その言葉はまるで、喉元に衝き付けられた短刀。

「それは……」

静かに小さく唾を嚥下して、岩鏡は視線を動かせないままでいた。

「僕からしてみれば、甘さでしかない」

「……っ」

「このまま増長させれば、よつと多くの民が苦しむ。

かに彼らの言にも一理や一理もあるでしょう」

其処で区切つて、義真は空を仰いだ。

垣間見えるその眼光は、濁つて澄んでいる。

「この王朝は、腐敗しきっている。宦官によつて政治は墮落し、天子は傀儡。金や賄賂が物を言つ時代に成り下がつてしまつた。民衆が蜂起するのも致し方ない」

携えた鎌が重々しく揺れた。

気付くと、義真の顔が触れるか触れないかの距離まで迫つてゐた。「ですが」

細い目の奥の光から目が離せない。

義真の口の動きも、揺れる髪先も、全て岩鏡のものになつた。「模範となるべき、ならねばならぬ英雄が、実害になつてしまつては、話にならない」

「本末転倒も甚だしい」

「これで貴女が、岩鏡君が僕を卑怯と罵りつゝ、一向に構いませんよ

顔が離れる。

前髪に隠れた表情が暗く翳つて、奥が見えない。

「僕は……俺は、これを『義』と信じてゐるのだから」

ふと一瞬見えた、奥歯を噛み締めるような表情。

それすらも演技なのか。疑いは深化する。

「……仮令、岩鏡が俺を見放そつと、」

義真は馬を進めた。

岩鏡はその背中を見つめる。憂い？ 決意？ 寂寞？

「これが、最も有効で、最も民を安寧へ導ける『真』の『義』であると、」

でも力強く、義真は謳つよう、自分に言い聞かせる様に、云つ。

「俺は確信しているから」

そう語る義真を眺めながら、岩鏡は思つた。

この男は食えない、勝てない。狡猾で、でも筋は通して。まるで物語の主人公の様に、役者の様に、振る舞いて駆け引きをする。この男は蛇のようだ。鋭く痺れるような眼、静かに忍び寄り、巧

妙に巻き付き、絡めどりよつて口で舐め擦る。

負けた。正鏡は舌を巻く。もつ絡めとられた後だから、逃げるこ

とは出来ない。

惚れてしまつた後だから。深みに嵌まつて抜け出せないよつな奈落に心が浸かつてしまつたから。

「……義真」

「はい？」

「貴方が望む彼方まで、共に歸させて下さい」

「…………勿論」

口角が歪んだ。

そう応える表情は。

不敵に、狡知に、囁つてこよつて見えた。

蛇の如く行く。蛇が行く。

死の舞踏へと続く、この土氣色の絨毯を。

薄汚れた黄を、真紅に染める為に。

第十四葉 毒には毒を以つて制す・上（後書き）

・ 皇甫嵩義真（真名はなし）

背丈：173cm

武力：？？

軍略：81

知力：77

統率：69

政治：61

馬術：78

概要：官軍の切り札。岩鏡を愛する。

糸目、緑髪。

底知れない実力と狡猾さを秘めた人物。

第十四葉　　毒には毒を以つて制す・下（前書き）

これにて義眞のターンは終了。

第十四葉……毒には毒を以つて制す・下

「嗚呼」

光の射さない洞窟の暗がりの中で、一人の男が呻いた。
男の目の周りは赤く塗られている。

赤い化粧は溶け頬に赤く伝い。虚空へ向けられたのは、呪うよくな眼差しだった。

「貴女様は、逝かれてしまった……」

その手の中にあるのはかつて直々に預かつた、黄色の布。
愛しい無垢な笑顔が、未だ網膜に焼き付いて離れない。
赤く滴が滲んで、無垢な黄色がまだらに汚れていた。

男には、それは見えない。

ただただ暗闇で慟哭する。

ぐぼつ、とくぐもつた咳が口から漏れた。抑えた手には血が生々しく光っている。

男は、布を再び頭に巻きつける。

刀をとつた、

もう止める者は居ない。

愛すべき主君も、鬼灯も、此処には居ない。

「はは、はは……」

狂つたような声で、掠れた嗤いが溢れた。胸が軋んで、痛んで、血が撒き散らされる。

闇の胎動に震えて、男は立ち上がつた。

その男の名は、波才と『云つた』。

ぼやけて霞む視界の中に、野太い声が響く。

洞穴の入り口で、腕を組んだ男が仁王立ちしていた。

波才はちら、と視線を向ける。男の名は程遠志。

筋骨隆々の肉体を晒している。

不愉快そうに波才は舌打ちをした。

「兵の五分の一は死に、三分の一は体調不良を訴えているんだが」「知つている」

すると、程遠志は呆れたように頭を搔く。

知つているのならどうにかしろ、と非難の眼差しから皿を逸らす。

「風土病や飢え、不衛生故にな」

「知つてんならどうにかしたらどうなんだよ?」

「どれも我ではどうしようも無い」

「食糧ぐらにはどうにかなんじやねえの?」

「無駄だ。補給路を断たれた」

「!」

報告を受けたのは「」く最近になつてからだつた。

波才も、義真や岩鏡を舐めてはいなかつた。しかし微に入り細に入り設計した補給路の橋は落とされ、道に岩や木々を積み重ねられた。更には拠点まで制圧されている。

波才自身毒を呷つてから、官軍がわざと奪わせていることに気づいていた。

このまま全滅するのも時間の問題だつた。

「おいい! どうすんだよ!」

胸倉を掴み上げて程遠志が唾を飛ばす。

波才はそれを拭いながら血を吐き捨てる。

「今宵、夜討ちをかける」

「…」

「皇甫嵩が長社を拠点にしているのを確認している」

「…そつこなくつちやな」

「部下にも伝える。苦痛は間もなく終わる、とな」

「どういう意味かは知らないけどな、俺は官軍!」とさしてこや絶対に、負けねえぜ?」

力強く程遠志は言い放つ。死に逝く台詞としては上々。

背を向け出ていくのを視界の端に捉え、波才是また小さく吐瀉し

た。

大蒜にらにくを袋から取り出して口に含む。

「 時間は、もう無い… 」

脳裏には天和。人和。地和。

鬼灯の死ぬなよ、という声が頭を過る。
無理だつた、すまない、と小さく呟く。
刀をとる手が震える。

洞窟の外へと目を向ける。

夜、外に光は見えない。

其処に居るのは女神か死に神か。充血した目では、見ることが出来ない。

しかし進むことしかできない。

これが革命の代償。波才に後悔はない。

「 来ましたね 」

夜。突風が頬を掠める。義真は小さく息を呑んだ。

今夜は風が異常に強い。波才軍はこれでないと動けないという条件があつたため、義真の今夜、という予想は的中したと言える。そしてこれは義真にとつても好都合だつた。

茂みが、草がぶつかってけたたましい音が生まれる。

しかし、数万の波才軍が決戦を仕掛けてくるのに行動する音は人工的で不自然。

「 三万～四万も動けば、分からぬ訳がない 」

敵軍勢は四方から。

義真は身体を震わせた。

寒さに囚るものか武者震いかは解らない。ただ隣の岩鏡を抱き寄せるだけにした。

暫し呆けていた岩鏡は、頬を朱に染めて、静かに抱きしめ返す。

「つ……。」、これで少しは温かくなるのならば、私は何時でも

……

「続きは後です。それに、この策で大分熱くなるでしょうし」

義真は田单の故事を反芻していた。

戦国時代の齐国の名将、田单。

彼が燕国を破った計略は火牛の計。

「火牛の計……ですか」

「ええ。籠城戦で田单が執った奇策です。今回のよつな田は、大いに猛威を揮つてくれるでしょうね」

「……できるでしょうか?」

「無論」

少し表情を翳らせて、岩鏡は言つ。

「正直、私は少しばかり、怖いので御座います」

義真は驚いたように田を剥ぐ。

その後微苦笑して、応えた。

「僕も、怖いですよ。戦の前は、何時も怖い」

「それは、見えないのでですが」

「恐怖を、押し殺しているからですよ。緊張で、決意で」

「決意……」

「守らなくちゃいけないものがある、なんて理由づけてですよ。自分を窮地に置くんです」

「守らなくちゃいけないもの……」

「だから失敗は許されない」

「守るために?」

「そう」

「例えば……?」

「岩鏡君、君とかね」

貼り付いた笑みに、柔らかい微笑を重ねる。

期待通りの台詞なのに、岩鏡は面食らつて黙り、やがて両手で顔を隠す様にして義真の胸に収めた。

愛しい人の髪を撫でて、義真は一言二言囁く。もつと紅潮して、胸にいやいや、と顔を押し付けて、背に両手を回した。

もつと撫でて、と思いながら、つむじに落とされた熱を帯びた唇を感じる。

口にも、と上を向いて目を閉じる。静かに熱を共有して、寒さをまぎらわす様に形をなぞるように口付ける。

首に回した腕に義真の力強さを感じて、もつ堪らなくなる。戦争の前で昂つてゐるから仕方ないよね。岩鏡はまた唇を押し付ける。蕩けるような熱の中で、そこはかとなく視線を感じて警覺すると、居心地悪そうに兵が立つてゐる。

慌てて離れようとするが、義真が強く抱き締めるから離れられない。

羞恥に晒され恥ずかしそうに声を上げる。義真は愉快そうに笑んでいる。

悦しんでもつてゐるな、と睨み付けると、義真は残念そうに唇を離す。

「さて、そろそろ頃合いや良し。牛を放して下さい」

「はっ！」

漸く去れた兵を尻目に、朱を超して茹で蛸の様に赤い岩鏡を余所に、瞼を閉じて涼しげな夜風を目一杯に吸い込む。

喧しい鳴き声と共に、油を撒いた木々が燃え盛り始める音が耳を支配する。

やがて肉の焼けるような、香ばしくて下卑た悪臭が鼻を劈く。

瞼を開く。

蛇の眼光。

「英雄さんよ。精々地獄を味わってくれよ」

燃え盛る火の中。

波才は、焼け落ちていく世界の中で。

一人の少女を、想つた。

それは長年を共にした、最愛の主君ではなかつた。

只の部下だつたのに。

死ぬ間際に想起したのが、彼女とは。

もう自分は長くはない。

死んだ人々を想つても……。

波才は、燃え盛る紅蓮の中を、歩む。

毒に侵され、霞む視界を頼りに、踏み出す。

逢いたい。

ただ只管に、逢いたい。

「鬼灯」

この手を。

触れさせてくれ。

第十四葉　　毒には毒を以つて制す・下（後書き）

義真、どうみても悪役です本当にあつがといひやれこました。

復帰。
投稿。

時間ができたので。

「ふやけてるわね」

私は咳く。夜の湿つた風が髪を攢つて鬱陶しい。
態々この私が田舎くんだりまで来てやつたと嘆つのに、黄賊共は
夜通し宴会、宴会、宴会。
いい加減嫌気がさしてくるわ。何かの策略かと思つて律義に毎夜
毎夜偵察出してやつたのに。呑めや騒げやの馬鹿騒ぎ。

田舎にてはやけに踏み固められた道。後ろから蹄の音が聞こえ
る。

「まあ、やうおひしゃらないで下わい華琳様。補給路も順調に断つ
てこるのですから、収穫は充分にあります」

「やひ、ね」

淡い蒼の上田を隠す髪を靡かせ、『』を握り直し私を諭すのは我が
腹心にして秋蘭。

轡を並べ、同じ高さから奴らの根城を睥睨する。

「ああ、それともう一つ」

「何?」

「どこの轡重を点検しても量が著しく減つてゐるのですが、如何な
ことでしょ?」

「ふむ

ああ、そうね。なるほど。『』がこつたわ

頭に「?」を浮かべる秋蘭。

教えるのは後にしましょ。闇でたつぱり、とね。

「戦力面から見れば、取り敢えず、中に管亥と張曼成が居るのは確認しているのよね？」

「はい華琳様！　：俄かには信じ難いですが。華琳様程の御方が認める奴が、この馬鹿騒ぎに参加してゐるなんて」

悪態を吐いたのは桂花だつた。猫耳が可愛らしいわ。

大の男嫌いだけど、そこも私にとつては高評価ね。使えない無能な男が余りに多い世の中だものね。

有能で何より私を心酔している。私の自慢の軍師。

「管亥が怠るとは、確かに考え難いわね」

管亥　、原始黄巾党の波才の右腕。剛毅、と揶揄される程の英傑。

詳細は詳らかにされていない。つまりそれは彼が情報戦や諜報に長けていることを意味する。

そして、武力は遙かに波才を凌ぎ、官軍では手をつけられないと謂われたほど。

数少ない有能な男の一人。できるなら、彼は欲しいのだけど。

「まあ。我らには姉上あねじょうがいるから、何も問題はないのですがね」

「ん？　呼んだか秋蘭よ」

ずっと先で振り返つたのは、姉の春蘭。黒い髪が月夜に溶けて幻想的でそそられる。爛々とした瞳は、虎か獅子のよう。首輪のついた猛獸。

私の元に歩み寄る姿は忠犬。撫でてやると尻尾を振つてすり寄つてくる。

これでも、こと武力にかけては我が軍切手の実力者。ちょっと頭が足りないけど、それも愛嬌の内よね。

「ええ。貴方達には期待しているわ、春蘭、秋蘭、桂花」「！　はい、華琳様！」

「必ずや御期待に沿つて魅せましょう、華琳様」「はい！　男なんて早く潰してしまってー！」

異口同音に応える。

いじらしく愛おしくとも頼もしい。

「次の黎明時、朝駆けするわ。引くわ、用意をしましちう」

今も未だ喧しく蛙鳴蝉噪と騒ぎ立てる者共よ。

死に逝く覚悟をなさい。

私を敬い畏れ、そして果てろ。

風が私の頬を撫でる。それは傍らで渦巻く。

「……」

（外を取り巻く風が変わった、か）

夜も深まり暗闇が増す。

どこで鎌首を擡げているか分からぬ英雄の眼光が、光っているに違ひなかつた。

黄巾賊の根城ではから騷ぎが行われていた。

から騷ぎ、と云うのも無理して騷いでいるからで。何より、横になり黄疸をつくり隈を濃くした男達が憔悴しきつて横たわつてゐる。

管亥は嘆息を零した。視線は窓から城の外へ向けられている。

黄色の布で短い髪と口元のみを覆つてゐるが、それでも覗く活動的で若々しい肌の色。仄に紅の交じつた黒い瞳や凜とした眉、中肉中背の九尺僅か程度の背丈。眉目秀麗と云うよりは威風堂々。齡は曹操と変わらないだろう。少年と青年の中間点。

しかし器は非才で、聰明で剛胆。とは言え老獴さには欠けて直情径行であつた。

策を考えたのは管亥だつた。

馬鹿騷ぎして注目を引き付け、宴を断続させることによりこの城に満員でいると思わせる。実際は少しずつ見つからぬ様に曹操陣營に伏兵として忍ばせる。

そして、朝か夜に一気に襲撃を受けた際に、少人数で籠城戦を行。一方、張曼成による指導の元、大量の伏兵を展開し曹操陣營を

強襲。

策だけ見れば、策だけ見れば、管亥の有能さが窺えただろう。しかし現実は非情で、此方は賊軍。後ろ盾などあるはずもなく、物資や食糧は現地調達。更に補給路も断たれた。飢えるのも時間の問題。

そして最も深刻なのが、断たれた上に中身を確かめられた事だつた。つまりそれは逐一内情を探られているようなもので、この城の人口などされているだろう。

謀略や策略と云つた類の物は万が一にも億が一にも、画竜点睛を欠いてはならない。隠密に緻密を重ね、ようやつと始動するものであつて。

相手が悪かつた。慎重に遅く動かれた為に、こちらは少人数であることを悟られぬよう騒いでいたのが裏目に出で、もう兵の体力は無い。

再度ため息が漏れる。

声をたて続けなければならない兵士たちにもそれは届いて、陰気に響く声が深まる。

（負け戦が確定しちまつた。まずいぞ……）

昔から爪を噛む癖は直らなかつた。緊張や焦燥すると必ず噛む。

波才に恩義はあつた。しかし張角やら張宝やら張梁などは顔も知らないし、義理を立てる道理も無い。究極的に言えば、黄巾賊自体は、どうでもよかつた。

降伏しても構わない。

とは言え死は怖い。

逃げ出したい。しかし自分が原因で、仲間が死に逝く咎には耐え

られない。

噛める爪はもう無い。

ただただ、少年の小さな體には、じつに重き荷だった。

夜は更け行く。

月は雲に翳り。

明るく輝く遠い東の空。

遙か蒼天には、血の様な太陽が昇つていて。

兵
神。

曹操軍の騎馬隊が黎明を駆け抜ける。

所々恐らく黄巾賊に困るものと思われる倒木や大岩が散見されたが、何の甲斐も無く乗り越えられていく。

大軍の行軍で地響きは激しい。

幽かな蒼天の日が出が往く先を照らす。去りゆく空は暗い。

西。

陽が届かない？ 違う。

煙が、西の空を支配している。

西は未だ、黄天の空だった筈だ。

旧・曹操野営本陣。

一帯は焦土と化し、灼熱の焰が木々や人々を呑みこむ。

うねる様な炎熱の波動が黄色の布を、絶えず噴き出る漆黒の煙の暗幕が空を覆う。

消し炭へと炭化した死体と半身爛れた死に欠けの屍。それは何れも黄色の布を巻き付けていた。

一人の男がその中を練り歩く。

その男の髪は異境の朱髪。

並外れた長躯と提げた長身の両刃剣。

荒廃した世界を映し出す鏡のその奥。 その双眸からは何を推し量ることも出来ない。 只無比に、無情に、無慈悲に歪む。

風が一陣舞い、足に絡みつく炎の蛇を切り裂く。

鼻を劈くのは芳ばしい死臭。 何食わぬ顔をして男は歩く。 業火の中は不思議と静かだ。 不自然に大きく足音が場に静かに染み渡る。 異様。 圧迫的な存在感も、汗一粒見せぬ透き通った肌。 息苦しそうにも見えない。 ただただ淡々と何か者を探す様に奥へと足を踏み入れる。

砂を踏み躡る音が聞こえた。

音、それは強大な、凶大な恐怖。

張曼成は邪氣の塊の様なそれに圧倒された。

童顔で女性的な顔の半分は焼け爛れ、四肢は欠け、刀を握るその手は心許なく震える。

左腕が瓦礫の下敷きに潰れ、火が燃え移つたので腕を切り落とした。 血が間欠泉の様に吹き荒れる中でも、痛みが身体を麻痺させ逝く中でも、苦しみはその恐怖に上書きされる程。 呻き声は口から消

え、内臓が締め付けられ、絶え絶えな気息に変わる。

失血して霞む視界と終焉を告げる鼓動の明滅。

身体に移り移った火が身体を消し炭へと変え、存在が消えていくなかでも、視線をはずらせない。

失うものは何も無い。

それでも、恐怖を感じる。

これは根源的な恐怖。

そう、まるで人が神々へ向けるような

「張曼成」

厳正な声が耳の中で反響する。一切の余韻は無い。その言葉に在るのは意味だけだった。

呼ばれた事に気付くのには時間がかかった。

「……はい」

「苦しいか」

裁き。

これは有罪判決、死刑宣告。そうに違いない、張曼成

枇杷は、炎の影に揺らめく姿を見て、今までの罪を清算をするのだ、と思つた。

手にした銀の剣が、己の首を断つに違いない。

「苦しくは、ないかなあ……」

「逝きたいか、生きたいか」

おや、この死に神は選択の余地を呉れるのか。幽かに目を大きく開く。

罪と咎に塗れた汚らしい手。

見つめて枇杷は厭になる。

「殺してくれる、のかい？」

「殺めることは容易い。人間から墮ちた悪鬼、しかし地獄では生温い」

はは、と乾いた笑いが枇杷から漏れた。

諦観。悲観。ただ、絶望はない。

どこまで墮ちるのだろう、黄巾賊。夢見たのは太平だつた筈。はははは、得られたのは死ねない地獄だつたよ波才。

しかし。

「しかし、私も又墮ちた身」

影が揺れる。

銀色の刃が薙がれた。

「私は英雄では無い」

黒煙が消し飛ばされる。

風が吹き乱れるような轟音は、断末魔か。

「私は、只の愚か者」

自嘲的に嘯く。

枇杷の身体がふわり、と浮いた。

血が固まり出血は無くなつた。それでも酩酊感は無くならない。ただ、どうであれ拒否権が無いのは知つていた。

ついて来い、悪鬼。手前は、選ばれた。
世界に、手前に、泰平を呪れてやうつ。

地獄へは遠回り。
兵神の行軍は此処から。

出会い。宿命。

改行と改行の余白が多いのは仕様ですので。機能美機能美。

「華琳様」

「何、秋蘭？」

「よひしかつたのですか？」

一馬身程先行なさつていた華琳様は、私の呼び掛けに御顔を向けて、心地よい笑顔で答えた。

「ああ、燃やした事？」

「はい」

速度を落とし、真横に並びなさる華琳様。

その横顔からは何の気掛かりも後悔も見えない。

何のしがらみも無いような、飄々としたもので。

晴れ晴れとした様な口元から漏れる、痛快そうな歪んだ嗤い。

背筋が凍る。滴る汗さえ見透かされているような錯覚。

「……本陣を燃やしてしまわれるなんて」

「そうね、私の触れた物が汚らしい賊の男が触れるなんて耐えられないわ。だから燃やしたのよ。つふふ、ついでに賊共も燃えてたわね？」

「ついで……」

ついで、程度なのか。霸王にとつて何万の命は。

「秋蘭、私に着いてきなさい。たすれば、泰平を上げるわ」

恍惚として、選択肢を選ばせない不敵な表情。

そうだ、と思った。

これが霸王。私が従う君主。

何者よりも気高く、何者よりも誇り高く、そして情け容赦ない。

胸に蟠りが無かつたわけではない。

でもただ、唯々諾々と従つていれば良いのだ。

華琳様 曹孟徳の御心の礎に我が魂を。我が亡骸を。我が全てを。

悔いは無い。

滴る汗を拭う。何故だか、冷や汗が止まらない。

城の直前まで駒を進めようが、城の動きが無い。

それまで行われていた喝采が嘘のように鳴りを潜め、不気味なほどの静寂が広がっていた。

命を受けた春蘭が駆け出す。携えた剣に兵が呼応し、雄叫びを上げる。城門を蹴破り、鬼のような膂力を以て楔が放たれる。瞬く間の進攻。断末魔が数回聞こえた後は静かだった。

弓兵が矢を構え騎馬の馬が唸り時間が刻々と過ぎ行く。砂嵐が視界を遮る。第一波の許?の軍勢が城へと駒を進める。

やがて城壁に見慣れた黒髪が靡く。空高く剣が掲げられた。つまらない幕引きね、と呟く声が一人に聞こえた。

秋蘭、桂花。一様に、声の主を見つめる。

城の内部から運び出されたのは死に欠けた黄巾。それは襤襷雜巾のよう。

桂花は媚びる様に首肯する。

秋蘭は、身を裂かれた様に、苦虫を噉み潰す。

瘦せこけたものの自力で歩くことが出来る敵兵は保護されていく。

そして一警する。視界の端には、四肢を欠いて、飢え罹り苦しむ人々。

もう彼らは戦えない。治療する手立ても保護する食料も余裕も無い。

つまり。

理性では解っている。只、本能が悲痛を、無情を、叫ぶ。

すまない。すまない。

華琳が城内へ馬を進める。

遅く動く時の中、逡巡を感じる。

中へと向かう風が秋蘭の頬を撫でる。

(私は弱い)

だつて助けられない。

これは甘さ? 優しさ?

驕り?

答えが欲しい。

救いが欲しい。

それは強むへの.....

秋蘭は辺りを見回す。

弓矢を持つ両手が震える。

「どうしたの?」

「いえ」

風の声が、聞こえた気がした。

「お疲れ様春蘭。後でたっぷり褒美を上げるわ」

其処らじゅうに死骸の転がる通路を抜けて、広がったのは玉座の間。

血生臭さが鼻から抜けないまま見えたのは、書斎と云ひては広すぎる、天井の高い戸棚だけの部屋だった。

入ることが許可されたのは私達のような将校だけ。兵達は待機を命じられ、残党狩りを開始した。

「管亥はどうしたのかしら？」

「『めんなさい華琳様あー。逃げられてしましたあ

姉上^{あねじゅ}が書簡と埃に塗れながら言つ。

……どうやつたらこんな器用に全ての書簡は落せるの姉上よ。

「姿見たのね？」

「いええ。ボク達が来た途端に逃げ出したそうですよ

季衣が応えた。それに華琳様が、ぴくりと眉を

上げる。

絶を握る手が、肩が、張つていた力を抜く様に落ちた。拍子抜け

許？

上げる。

したようだ。

「『剛毅』が？ 冗談でしょ？」

「どうやら眞実のようです華琳様。残党兵が、そう証言しています」

桂花が姉上といがみ合ひながら入つてくる。どうにも馬が合わないようだ。

あーあ、こんなに粗相したのはどこかしら、と毒を吐くと、うづうづと肩をすぼめる姉上。とても可憐です……御馳走様。

華琳様が悩むように組んだ腕を解いた。

「……そう。いいわ、管亥は諦めましょ。その代わり、この中から捜すわよ」

桂花がやつた、と目を輝かせる。姉上も陰ながらよし、と喜んだ。あはは、と季衣が困った様に笑う。

人手が足りない問題が解消されない、か。苦労かけてすまないな。

「それで、何を捜すのですか？」

「ふふふ」

意味深に微笑みなさる華琳様。

「書物よ。それも分厚い、ね」

「木の葉を隠すなら森の中……途方もないじゃない……」

桂花が半ば諦めを露呈しながら、呴く。そんな彼女を華琳様が見つめる。くすくす、と笑んで応えた。

一刻も早く帰りたそうだ。ああ、露骨に顔に出すのは気を付けた

方がいいな。

黴臭い部屋に厭き厭きしたのか、それとも早く『御褒美』が欲しいのか。

どちらもだらうな。……桂花のことだから。

「ありますかねえ？ ボクお腹もうペーぺーですよ」

「これ季衣……しかし確かに、桂花の言つ事も尤も。本当にあるのでしょうか？」

「管亥が持ち出してなければ、ね」

「確率は未知数ですが、在るよりも格段に低い……のでは？」

「でも、尋常じやない位焦つた人間が懃々分厚い書物を持ち出すかしら？ それに残党の連中によれば、どうやら然程興味を示さなかつたそうよ」

「執務室もその他の書架にも無かつたので、此処にあるのはほほ間違いないのですね！ 流石華琳様！」

そう言つた処で、桂花がうん？、と首を傾げた。

「少し宜しいですか華琳様？」

「何、桂花？」

「それつて、どんなのですか？ 厚い、薄い？ 新しい、古い？」

「張角から受け取つたそれを、波才が管亥に託したと言われる、古臭くて分厚い書物よ」

「なみはどんなのなんじょうか？」

それまで黙つていた姉上が口を開く。

無垢な瞳に、桂花は呆れ返つて口を閉ざす。華琳様は、嬉しそうに苦笑した。

「…………そうね。それには、世の理、それから全ての事象に対す

る答えが隈なく記載されてこる「」のよ

「それは…凄い」

息を呑むような音が聞こえた。

……全ての事象に対する答え、か。
「」の不幸の果ても、無情の理由も、この言いしれぬ漠然とした不安の答えも、載っているのだろうか。
そして……私の生きる意味も。

「それで、その名は？」

私の問いかけに、華琳様は、妖しく、悪戯めいた笑みで。
言じよつの無い艶やかさとおだましさを匂わせて。

嚥下する唾の音が鮮明に耳に聞く。

嗚呼、と恍惚わたり、

「太平用術の書

」

「

ああ、それってこれのことですか?」

銀色の風が逆巻いて。

黄ばんだ羊皮紙のような紙をはためかせ。

銀色の双眸。

愉快そうに、不愉快そうに、垂むそれ。

私は、釘付けた。

「わあ 今回もまた最後まで書けなかつた.....

第十六葉……遠ざかる足音

「あらゆるものへの応えなんて、知りたいですか？　自分の全てを？　世界のすべてを？　何もかもの、存在理由も？　知れば狂つてしまつような、狂氣の歴史を？　眞実を？

もしそうなら、器の多寡も知れてる。期待はずれですよ、

曹孟德」

高い書架に腰かけた男が、辛辣に言葉を並べる。

ただ淡々と紡がれる台詞に、反応したのは春蘭だった。

肩を震わせながら、剣の切つ先を向ける。

「黙つて聞いていれば好き放題言いおつて！　赦さんぞ貴様ア！」

言ひや否や。

真つ直ぐ駆けだす。

華琳様の制止も聞かず、棚の壁を蹴り上げ飛翔する。剣の腹が、男を一分せんと斬りかかった。その刹那。

「狗は退いてなさい」

突然笑みを浮かべた男から、雄大な風が放たれた。

質量を持つ圧倒的な風。

空中で、真正面から受けた春蘭の身体が跳ね飛ばされ、床へ落下した弾む。

肺から空氣が圧し出され、カハツ、と息を吐く。

追随するような矢が弓の弦から放たれた。

秋蘭が放つた五条程の矢。

届く直前に、男の姿が消える。

渦巻く風を残して、声が残された。

「夏候の妙才。冷静を欠いてはなりませんよ」

忽然と、秋蘭の眼前に姿を現す。覗きこむなり、挑発するよう腰を屈める。

驚くほどの背丈だった。

銀色の双眸が彼女の動搖した顔を映す。

打ち付けるように繰り出される鉄球を蹴り飛ばす。

釣られて壁へと叩き付けられる季衣へと視線を向けようとしても、田の前から注意が逸らせない。背筋に冷や汗が伝い、身体が震える。

「力量を、彼我の才を、差異を、測りなさい」

「無意味。華琳様を御守りする事こそ、我が使命なれば」

「不毛な忠誠。勇ましくもなければ恐ろしくもない」

「それでも、だ！」

震える、遅い身体を叱責し、右手を衝き出す。男は秋蘭の拳を掴み、握り潰そうと力を込める。

男のもう一つの拳が鳩尾に吸い込まれる。

「ぐぼつ……」

ぐぐもつた声が漏れた。視界も揺らいで、身体が意識と共に崩れ落ちる。

そして又、位置を変える。

如実に現れる身長差に、華琳は見上げる羽目になる。見下すその眼光に、慎重さを偽つて声を投げかける。

「貴方が……管亥？」
「まさか」

また風を空気を裂いて位置を変える。数歩ほどを一息に後退した。茫然と立ち竦む桂花や怯む秋蘭、漸く立ち上がった春蘭と季衣を一瞥つつ。

男は嗤つた。

「だつたら、何者よ」

視線を一身に受けて尚、万物の王の様に泰然と構える。

ぶわ、と風が発生し、本や紙が舞い上がる。長剣を掲げた。

巻き上げられた紙束を鎌鼬に切り裂く。

紙吹雪の中。

視界を覆い尽くす程の白、白、白。

「私は、羌楓の軍」

劉の名の元に。

華琳ははつと息を呑む。
耳元で、囁く声がする。

幽かな華の残り香を求める、
哀れな死に損ないです。

「軍……へえ」

第十六葉　遠ざかる足音（後書き）

うーん、出来が不安です。
修正かけてマシにするのでじ勘弁を。

第十七葉 近付く足音・上（前書き）

安全と安心と信頼の鈍足亀更新。亀に謝れ。

と云う訳で漸く桃香編。
頑張れヒロイン！

時は遡る。

朱雠も皇甫嵩も曹操も退出した玉座の間。彼らが去つてから暫くが立ち、桃香達も出陣してからも暫くが立つが変わらない空氣が流れていた。

白蓮が眉間に指を当て、椅子の上で胡坐を搔いている。精神統一でもしているのだろうか。

星は柱に凭れかかり、その様を見つめる。

待機を命じられ進退窮まる身としては板挟みで冷静でいられないのも理解はできる。

重苦しい訳ではない静寂を切り裂いて、白蓮が口を開いた。

「まだ、かなあ……」

得物を磨き息を吐きかけてから、星は嘆息交じりに答える。

「未だでじょうな。便りが無いのが良い便り、せめて黙して待ちま
しょうが」

縋る様な瞳で見つめていた白蓮は再び瞼を閉じる。

時折震える右手が剣を握るつとするかのように辺りを探る。

苛立ちか悔しさか。

それを推し量る術を星は持たず、また武器へと皿を落とす。

持て余す感情は溜めこまない方が良いの。常に星は思う。しかしこれが白蓮。誠実で、生真面目で、心配性で、損な性分。

白蓮が白蓮たる所以なのだ。

何より、それこそが己が仕える理由。軍が手を取る理由であると思つ。

酒を口元に運び呷る。

無論星も不安に思つ点もある。

しかし見やれば、額に塩辛い汗を見せながら奥歯を歯み締める白蓮が居る。

自分が冷静を保たねばならない。

仕えてこる食客の口が、支えてやらねばならぬ。

故に。

「……まだかなあ」

「未だでしょうな」

「まだ、かあ……」

執拗に繰り返される言葉を、

宥める様に諭す様に応えてやるのだ。

聞こえる足音。

むりむりと揺れて、武器に括つつけた鈴の音が啼く。

どのくらい走ったかは把握し切れない。
汗が流れ、乾く程度の時が流れた。

それでも北京からそう離れてはない。

馬の地鳴り。

砂塵が吹き荒れ、燐然と太陽が照りつける。
その中で一際響く音。

しゃん、と鈴の音が啼いた。

桃香は砂塵舞う荒野で目を細めた。

愛紗、藤、雪柳、鈴々。

続く軍勢と勇将に、沸々と笑いが込み上げてくる。
噛み殺しながら馬を驅る。

壯觀だ。爽快だ。

私は、非力じゃない。卑屈になる必要なんて無い。

靖王伝家を握る汗ばむ手。
力が一層籠る。

「……桃香様、御機嫌ですね」

不思議そうに、愛紗が肩の位置を並べて言つ。

「あはっ、解る?」

敢えて茶化す様に、獰猛に笑みながら応える。

愛紗は内心で感心する。

変わつたな、と思わざるを得なかつたが、口には出さない。

在る程度筋肉の付いた身体、ほんのりと健康的な血色の肌色。弱
弱しさを感じさせた瞳も、もう無い。

痩せた、といつのは不羨か。

只、以前の様な儂さは無い。泰然自若とした、摩訶不思議な落ち
着きがあるだけだ。

まだまだ速度を上げようとする桃香。
後ろから声がかかつた。

「桃香、余り、はしゃいじゃ駄目」

藤が淡々と言葉を並べた。

愛紗は後ろを警観する。

涼しげな顔で走る雪柳も居た。

口の脇に苦笑を見せながら。

冷たそうな唇が困った様に動く。

「些か勇み足が過ぎるかと存じ上げますが
「……そうかな？」

「そう」

「敵はもつ近いと愚考致します」

「蹴散らすことは容易い。でも、死んじや意味無い」

「その通りです」

「……でも、先に行けるよ。私なら」

「鈴々はもつと行けるのだ！」

蛇矛を握り、鈴々が躍り出る。

ちりん。鈴の音が啼く。

風を纏つた鈴が揺れて音を吐き出す。

見えてきたのは靡く『黄』の旗。

未だ距離はある。

荒野の中心に本陣を立てるのは何故。
死ぬ気か。決着か。自身の表れか。

細められた目が、すっと霸氣を帯びた。

その意氣や好し。潔い。只、それ故に気にくわない。

「總員」

びりびりと大気が震えている。

獅子が、殺意と怨念を渦巻かせて吼えているのか。
もう片方の長刀を抜いて、本陣へ向ける。

「加速せよ」

獅子の斧の光が煌めく。

『黄』の旗は薄汚れて。
黒く、赤褐色に変わった。

それでも立ちはだかるというのか。

「遠慮なら要らない」

金属の、装填された様な重々しい音が耳に届く。
赤くたなびく髪。

来い。

そう聞こえた気がした。
行くよ、今。

「切り込め！」

第十七葉……近付く足音・中

「徐晃様。敵本隊が切り込んできます！」

「お前は俺の目が節穴にでも見えんのかよ。俺にだつて見えてら」

夥しい砂煙が前方から見える。

兵士達は慌てて戦支度を整え始める。

おせえよ、お前ら。

恐怖は無い。

勝機も闘争心も勝算も氣力も無い。

只、この世の未練さえも失つた。

「波才の兄貴の遺志を俺は胸に刻み続ける

」

小声で呟く。

そうすれば、未だこの世に害悪として残つてゐる理由を正当化出来るはずだから。

後追いを出来ない自分を責めなくとも済むのだから。

静かに、空っぽの瞳で見つめる。

「分裂した、か。来るぞ、挾撃策が」「
挾み撃ちだ！ 総員、体制をとれ！」

鬼灯の声に呼応するように軍勢が動く。

しかし眼前の軍勢とは比較するのも烏滌ましい程の練度の差があ

る。

今更、どうとこう事もないな。

「もうひと道間に合わん」

平和を願い蜂起した者共。無情等と嘆く術も道理も持ち合わせでない。

渴いた心に空しく吸いこまれるだけだ。

「せめて」

砂漠の砂のような此処と心。

慰めは要らない。

「地獄の御供にでも付いて来てもうおつか、な

斧を握り直す。

乾いた風が頬を掠める。

作戦区域に突入。

戦車の残骸の板切れ等を踏み越え、紅蓮の中へ身を躍らせる。

『黄』の旗がそちらに転がっている。踏み越えるのに良心の呵責は無い。

既に、黄巾党は過去の遺物になりつつあると桃香様は見解なさつていた。

各地で多くの反乱の英雄は碎け散り、残つたのは徐晃だけ。

恐らく、今の私達の敵ではない。軍様のご加護を受けた私達には。

「はあああああつ！」

雄叫びを上げる。

びりびりと震える大気。

部下の部隊も、馬も呼応して、精神が高揚していく。

肌が粟立つて、此処が戦場である事がはつきりと意識できる。

居た。

振りかぶる徐晃の姿が見える。
構わず駒を進める。

「矢を放て！」

戦国時代の一国の趙の名君・武靈王が採用した馬上戦術が一、『
胡服騎射』。

馬から矢を番え、股の筋肉で馬を固定しつつ放つ。

やがては、とも思いますが、ねえ。命中まで期待してはいません。今は混乱の引き金になれば上等。

……矢が着弾し、その間に各兵抜刀する。

そのまま右往左往と陣形も体を成してない敵兵に切り込む。大蛇が卵を呑むように。

大波が漁村を呑みこむように、瞬く間に包み込まれて逝く。

私は、偃月刀を構えて、徐晃を目指して一直線に呐喊します。彼女もまた神速の足を以つて駆けてきます。

丁度、影が重なる時、徐晃の身体は太陽を背にして激しく跳躍し舞つていた。

斧が降つてくる。

「徐公明、その首貰うぞ！」

「取れるものならば！」

(！ 強い！)

馬上からの偃月刀と斧が激しく火花を散らす。

「甘えよー」

偃月刀に絡まる斧を弾く様に、徐晃は身を捩りつつ距離を取る。舞踏を踏むかのように、華麗に斧を振るう。

片手の斧による戟で、既に数人の部下が落馬するのが見えました。

大切な部下の命。

しかし大局を見失つては是非も無し。そのまま直線状に駆けます。

「なんだ！ 関雲長てめへ逃げんのか！」「どうとでも言え！」

そして再び胡服騎射。

憤る徐晃を尻目に、真っ直ぐ駆け抜けます。

所謂、車掛の陣。

「×」の形を描く様に馬を進める戦術です。

ああ、ほら。

遙か彼方から、怒涛の地鳴りが。

無間の槍衾。

どうか生き抜いて下さいね。

第十七葉……近付く足音・中（後書き）

あと桃香、鈴々、藤、雪柳と車掛は続きます。

次回はその先の御話。

次は色々な物語の節目。終焉であり、また新たな時代の幕開けで
もあります。

進行が遅くて申し訳御座いません。

もう少しテンポ良く進めたいのですが、力量も技術も及ばず。
精進して参ります。

矢に当たつて脳漿を垂れ流す死体。転がる首や手首。乱暴に切られた馬の足。血塗れの刀、黄色の布。その中には黄色の布を巻いていない首もある。

血溜まつは池のよつて、波紋を描いて生々しく光る。

その中に、鬼灯は立ち尽くしていた。

斧から絶え間無く血が滴り、その赤い髪は血を浴びて深紅色に染まっている。

茫然と見つめる先には、淡い紫色の髪に細長い針を携えた少女。近くには黒い髪を一点で結い、生温い死臭を帯びた風に絡まれ靡かせる少女が居た。

それは、かつての反逆の同胞であり腹心とも言えた者と、かつて対峙した英雄。

更に遠くには取り巻く兵。桃色の王と橙の少女、静かに佇む白銀の氷細工の様な女性。

つまり、此処には自分しか居ないと云ふこと。

「観念しろ徐公明。もつお前に道は無い」

「……」

「無碍にはしない。投降しろ」

「……はつ」

口の中の血を吐き出す様に吐き捨てる。

単純に不愉快だ。

「糞つたれ。男の尻追うだけの売女が何をほざいてやがんだ」

「負け犬の遠吠えなぞ聞こえぬ。早く諦めろ」

「処女みてえな面しやがつてよ。純ぶつてんじやねえよ

「口が汚いぞ雌。純潔は捧げべき御方が居るのだ」

視線が交錯する。

空気が、みし、と軋んだ。

愛紗の表情は透き通っている。瞳はいやに冷徹だ。
それに鬼灯は北叟笑む。

「さつもと尻尾巻いて男の元へでも行つてろよ。邪魔だ」「ほう、余程命が要らんと見える」

「だから、うぜえつつてんだろ。黙れよ」
ぐ、と愛紗が腰を落として重心を下げる。

偃月刀に刻まれた青龍が呼応するように狙いを定める。

鬼灯が思つているよりも幾分愛紗は冷静だった。
軽口程度で揺らぐような心持ではない。

「霸ツー！」

真つ直ぐに駆けだす。地を弾く様に、跳ねる様に距離を縮める。
大きな胸を仰け反り、そして両手を突き出す様に斧を向ける。

「がんツー！」と激しい火花を立てて武器が鎬を削つた。
額と額が接触するかしないかの距離。
零度の邂逅。血が水飛沫を上げる。

「おーおーイ。どうした、そんなもんかよ？」

「抜かせ！」

身を屈めて踏み込み、偃月刀を右、左、右、上、正面と自在に衝く。

右手の斧で受けた。その顔には余裕の表情が浮かんでいた。

「大した事ないなア 関雲長！」

右手の斧で偃月刀を反らし、左手の斧が煌めいた。

くつ、と漏らし、身を捩つて紙一重に躰す。
加速する時の中で、愛紗は徒手空拳を繰り出す。
左手で偃月刀の柄を握り、右手で顎を殴る。
ぐらり、と鬼灯の瞳が揺らいだ。

「ぐがあ……はつ」

間一髪。

偃月刀を握り直す。

そのまま地面に衝きたて、軸にして跳んで後退する。

ざつ、と片手で地を血を擦りつつ着地すると、一拍置いて、迎撃の斧の連戦。

偃月刀で受け、ぐつ、と圧し潰されそうになる。

鬼灯がにやり、と笑む。

が。

「 させない

音もなく針が飛来した。

咄嗟に右手で往なすと、間もなく紫色の旋風が押し寄せてきた。

鬼灯の前に立ちはだかる。

入れ替わる様に愛紗が遠ざかつて行く。

「騎打ちしかないとでも言つのか。
舐めやがつて、と鬼灯は舌打ちする。

鬼灯が犬歯を剥いた。

斧が軋轢に震える。苛立ちを隠せない。

「テメエ……裏切り者が。良くぬけぬけとその面見せられたな」
「手を組んだのはより早く軍様と出逢つ為。もう貴女達なんて必要
無い」

「そう、かいツ！」

尖端が途轍もなく鋭利な針が束ねられている奇奇怪怪な得物。

当たれば只では済まない。

それを何より、かつての同胞たる鬼灯は重々承知していた。

「相変わらずえげつねえなあオイ」

「死んで」

「てめエがな！」

そう勢いよく踏み込む。しかし斧は虚空を斬つた。

持ち前の身軽さを生かし、藤は一足で遙か後方まで下がつた。

逃がすか、と更に踏み込んだ鬼灯。

次に見えたのは射出され宙を奔る針。
爆発的な脅力を乗せて、針は散弾的に鬼灯の頬を掠めた。
驚異的な動体視力で見切つた。

が。

空高くに打ち上げた針の雨。

余裕だ、と弦く。

先程の殴打で、ぐらじと脳が揺れる。

鬼灯の足に刺さった。

「ぐあああつ！」

苦悶の表情を浮かべる。

一本の針を握り、藤が押し寄せた。

「覚悟

「ちいいいい！」

抜こうとしても力が入らない。

血が間欠泉に噴き上げ、血溜まりに冠を作る。

針が抜けないまま、自由が利かないまま。

斧の隙間を縫い挿い潜り、針が迫る。

「御休み

「ぐ、そがア！」

もう…駄目か、と唇を噛み締める。

瞼を、ぎゅつ、と強く閉じた。何処に風穴が開く？

早くしりよ。

未だかよ。未だ死ねないのかよ。

痛いなあ……足。

こんなことなら

「済まない」

声？

声が聞こえた。聞き馴染んだ声。

おい……おい。

ひつそりと瞼を開ける。

嗚呼、と心が震えた。

申し訳無さそうに囁いた。

気の利いた事は言えないから。

「死に切れなかつた、とだけ」

波才。

「てめえ……漸くかよ」

「だから言つた。済まない、と」

「それで済むのかよ?」

庇うように剣を翳し、針を弾いた波才。

死に欠けた茫洋とした瞳は無く、やや蒼褪めながらも瞳には確かに生氣を湛えていた。

ち、と舌打ちしたのは藤。

波才は、静かに敵に向き直つた。

「久しいな、藤」

「死んでなかつたの……」

「地獄より舞い戻つたぞ」

足は確かにあつた。

藤は近くに刺さっていた針を引き抜く。

ぞ、と音がした。

藤がちら、と見やると愛紗と桃香の姿があった。
頭数は揃つた。藤に並ぶ。

鬼灯が、ぐ、と小さく呻いた。

針が乱暴に引き抜かれた。

それは無造作に投げ捨てられ、からんからんと血の上を踊つた。

「俺も、まあ地獄から来てやつたぜ、波才の旦那」

「良くな来た、管亥」

「ははは……懐かしい顔だなア、おい管亥」

管亥。

少年は向き直つた。顎に手をやつて、生意気そうに、值踏みする
よつに桃香を見据えた。

「始めてだな、俺の名は管亥」

「始めて管亥さん。劉玄徳だよ」

「へえ、あんたがか。曹孟徳よりは怖くなさそうだ」

「そうかな？ そうかもしれないね。でも、逃げ帰つてきた分際で、
大きな口を叩かないで？」

強かに言葉を交わす。

表面はにこやかに笑つてゐる体だつたが、瞳の奥が笑つてない。

桃香はあくまで自然体で、頭に血の上つた管亥を冷ややかに見つ
める。

「桃香様、彼は私が」

「どうしたの愛紗ちゃん?」

「彼は危険です。恐らく徐公明に匹敵するかと」

すると桃香は薄ら嗤つた。

ぞつ、と愛紗の背筋に蛇の舌が這つた。

満面の笑顔を浮かべて労いの言葉を浮かべた。

「へえ。うん、頑張つてね」

「御意に」

飄々と振る舞う桃香に首亥は怪訝そうに眉を顰める。釣れない女だ、と口の中で呟く。

それより一刻も早く背中に蟠る何かを除きたい。

愛紗の偃月刀が目の前にあつた。

早いが遅い。俺には見える。

ぞつ、と圧倒的な力に飛ばされた。

桃香は息を小さく吐いた。
真撃な瞳で、波才を射る。

「……始めまして、波才さん。貴方とずっとお話をしたかった
「我、と?」

はい。桃香は応えた。

「どうしてこんな終わり方なんですか？」
「理解しかねるな」

波才は喉まで出かかつた血反吐を呑みこんだ。

「貴方は英雄だった」
「まさか」
「それは民が証明してくれます。しらばつくれないで下をこ」
「ならば、どうと云つのだ？」

血の上を桃香は歩く。
転がる首の上を跨いだ。

波才は動けなかつた。

「（）まで墮ちたのは、なんで」
「…」
「大義を見落としたのは、なんで」
「…」

言い終えると、桃香は波才を見上げる形で至近に迫つた。
覗きこめたのは無機質な瞳だった。
苦渋が滲んでいる。

「応えられない程度なら」

その程度なら。

「私は、今、貴方を超えられる」

英雄。 そんなもの。

黙つていた波才が口を開いた。

「汝に問おう」

「近しい仲間が死に逝つた時、」

「その恐怖に、寂寥に、耐えられるか?」

「問い掛けた。
是か否か。」

桃香は黙つて其の先を待つた。

「仲間と、敵愾心を抱く只の民を天秤にかけられるか?」

「敢えて言つなら」

「我には出来なかつた」

血の滲む黄巾。

外れて、血の池の水面に浮いた。

「我是弱者だ。身体共にもう滅入つてゐる」

「肉体は毒に病み、精神は崩壊寸前」

沈んだ。黄色の布が紅い先に見える。
波紋が立つた。

「我を正当と云つ心算も道理もない」

「只、これが、黄巾の正しい成れの果てであつたのだひつ」

それだけ、だ。
波才是言つた。

風が戦ぐ。血の池に波紋が立つた。
波才是目を瞠る。

『それは、只の甘えではないのですか?』
『それは、ただの甘えでしかないとと思う』
『恣意で徒に命を弄んだだけ』
『自分勝手に人を殺しただけ』

桃香の表情は透明だった。

腰から下がつて いるもう一対の剣が震える。

切つ先を向ける靖王伝家。
血が纏わりつく。
朱色に、ぬるり、と艶を持つて光る。

『墮ちた英雄よ』
『墮ちた英雄よ』
『高きを見上げられぬその眼差しに』
『高きを見上げられぬその眼差しに』
『我が』

「我が
『姿を』
「姿を」
『刻みつけよ

』』

風が『いづ、と鳴つた。

血が、沸騰する程に揺れている。

胎動。樹の根が、荒地から伸びた。

それ等は絡まり合い、一つの大木を作った。

血が吸い取られ。

幹で溢れて。

馨り彩つた。

楓。

遙かなる時の楓。

反逆の英雄に嵌められる。

断罪の葉。

その男の髪の色。

白銀を鏤めた深紅の色。

せつたよ妙ひやん駄文だよー。

詰め込み過(あま)り? いや、頑張つてかつじよく読んでくれ。)。)。) b

第十八葉　　蒼へ溶け込む黄色の空（前書き）

短いですが。

第十八葉 蒼へ溶け込む黄色の空

洛陽へと通ずる道程。

歩き続けた遙かなる道程。

この長きの終わりももう見えた。洛陽の城門が見える。振り返る事は無い。三人の人影が夕暮れに伸びている。かつ、かつ、かつ。規則的に響いていた足音が止まつた。波才と寄り添うように歩んできた鬼灯は、燐然と咳く。

「……なあ波才の兄貴」

「何用か、鬼灯」

波才是静かに鬼灯へ目をやる。

夕暮れを背景にして、鬼灯の表情は見えない。

「これで良かつたのか」

「……」

互いにもう、頭に巻かれていた黄色の布は無い。無精髭も剃つて、髪も整えた。

以前の様な陰惨な鬱々とした表情は無くなつていた。

「……いや、兄貴が断ち切るつつたんだ。俺は信じてるぜ」
そう言つた言葉も力無く、何処となく自己暗示に聞こえた。波才是、前だけを見据えていた。

頭の中では、全てが終わったあの日の事が、鮮明に反芻されていた。

「もう過去だけは見ない」

「ふ、と息を吐いて応える。

「あの少女に言われた、今を見ろと」

「……」

今度は鬼灯が無言になる。

「故に、今しか見んよ」

そう応えると、鬼灯は、応、と笑んだ。

顔色は見えなかつたが、どうやら朱が差しているのは夕日のせいだ、と波才は思った。

(最近よく笑う)

桃香率いる義勇軍に敗れ、軍と出逢つてから幾月が経つたか。鬼灯は、無垢に、快活に笑むようになった。何故かは詳しくは聞いていない。聞くのは無粋だ、と波才は納得していた。その笑顔は何にも代え難く得難いモノであつたが故。

「……そうか」

夕暮れの風は些か冷たい。

砒霜の毒は抜けきつてないので、余り身体を冷やすわけにいかない。不満そうな管亥を尻目に、鬼灯の抱擁が管亥を包む。鬼灯から粗暴そうな表情は抜けて、慈愛を以つて。

軍から華陀という五斗米道の者を尋ねるよう言われている。彼は名医で、忽ち病も治つてしまつだらう、と。

「漸く、一步が踏み出せる、な……」

「そうだな」

「ああ、そうだなあ……」

長い道程だつた。

本当に、本当に。

黄天の空は沈んだのだらう。

しかし。

零から、始めるのも悪くない、と、
波才は空へと手を伸ばす。

いや、正確には零では無い。

鬼灯が居る、管亥が居る、充分だ。

これからは蒼天の世。

未だ死んではない。死んでいないから、こうしていられる。

死んではないから、次の戦乱へと。

生きて再び、時代に一石を投じよう。

その為の新しい主君。

「はてさて、
曹孟徳は、
洛陽の何処に居るのだろうか。

第十八葉　　蒼へ溶け込む黄色の空（後書き）

彼らも未だ退場はしないのです。

第十九葉 再会と涙の染み

桃の花が香る。ところ、と蜜を垂らしたよつた淡い灯りが部屋を照らして、少女を甘く彩つた。

普段は静かで無骨な狭い部屋も、夜の外套に包まれて淫靡な雰囲気に変わつてゐる。

とろん、とした、瞼。長い睫毛が微かに震え、艶かしい舌が唇を這つ。

軍に触れられた髪が、手が、身体が、舐めたくなるほどつとおしい。胸の苦しさも忘れて、自分の身体を抱く。

彼が来る。その事に、桃香の気分は高揚していた。

「やつと、だね……」

呟く声は夜に紛れて霧散した。

桃香は反芻する、幽かな記憶の糸を手繰り寄せて。

彼の真名は蚩尤。真名は受け取つてくれたけど。

桃香達の要望に、彼はやんわりと苦笑して応えた。王にはなりません、と。只、私は貴女の御側に。

笑む朱色の兵神。

その瞳の奥の感情は読めない。

ましてや、恋慕を映す少女達の期待する様な答が得られる訳がない。

その真意を確かめたかった。

白銀の鏡に遮られた思いを。

「蚩尤さん……」

心地良く身体が温かい。

呷った酒の盃は空だ。

はう、と物憂げな嘆息が漏れた。

ああ、遅い。

時間を刻むのは気分だけ。遅く感じる。この一瞬も、無限の様に。

もしかして忘れられ

「 桃香？」

「 はうん！？」

肩に手がおかれた。

慌てて振り返ると、困り顔の軍が居た。

桃香は田を丸ぐする。

「 ど、どうして…」

「 ああ、いえ……。声をいくら掛けても返事が無かつたので…」

歯切れの悪い軍。桃香は怪訝そうに眉を寄せた。

眼鏡を抑え、咳払いする軍。

桃香は気付いた。薄手の寝着。

自分の開かれた胸元。淡く照らされる薄桃色の唇。覗くふともも。瑞々しい、均整のとれた肢体は柔らかそうだ。

ああ、と。

気分が落ち着いて。

悪戯をしたくなつた。にたり、と意地悪そつに口元を歪む。

「 ああつ。いけないんだ軍さん。いやらしこんだあ

幾分か大人びて成熟した色香を放つ桃香の汗ばむ肌。

軍と云えど男である事に変わりは無かつた。

寧ろ英雄色を好む。李に操を立てるといふこともあつて禁欲的な生活を経た軍にとつて、李の血を継いだ少女と、といふ背徳感と躊躇したいと思う気持ちもあつて、堪らなかつた。

そつと寝台に押したおす。白銀の眼鏡をとつて、白銀の瞳が桃香を映した。

(李……)

褐色肌に濃い桃色の髪、桃香よりも成熟して豊満な身体。片目を隠す様に伸びた艶やかな髪。ふつくりとした唇。触れたい。でも触れられない。

彼女の血を色濃く受けた桃香の身体。充分、魅力的だつた。

躊躇いませんよ、と茶化す様に口元を緩ませた。

「桃香、良いのですか？」

「何？」

「私は、人間ではないのですよ」

「今更だよ。私は、『軍さん』が大好きなんだから」

弱弱しく微笑む。背中に手を回す。

ぎゅっ、と抱きしめながら、桃香は羞恥で真っ赤だつた。人間じゃなくたつて構わない。人間に拘る理由なんてない。

(あうう…)

触れたかった。ずっと。

こんな至近距離で。胸の鼓動も、息遣いも、感じれるなんて。幸せ。

(せうだ)

「ど、どひじて、仕えてくれるんですか？ もうと、活躍できるような勢力もありますのに」

桃香だから、とか、愚問ですね、とか、そう言ひ答が欲しかった。

だけど。

その答えは、桃香の心で、隙間風を生んだ。ずき、と胸の奥が強く痛む。

「私は、劉へと傳ぐ者であるが故に」

劉。

(そんな……)

「貴女は劉備玄徳。私の、仕えべき主です」

劉の血に枷を嵌められた。

その表情は、意味深に微笑んで。心の立ち入りを阻むよつな、どこか距離のある、
拒絶、されてる、よつな、

「そ、うだね……」

夜の暗がり。

固まつた桃香の身体。

暗黒は桃香の表情を隠した。

ぎし、と寝台が軋んだ。
扉がきい、と開いて。
隙間風がさし込んだ。
桃香は身体を掻き抱く。

寒い。寒い。

去り行く背中へ手を伸ばす。

お願い、行かないで。
独りにしないで。

温めて。寒いの。

劉じやない、桃香を温めて。

血なんかじやない。

私を望んで。

お願い。お願いします。

『桃香』を求めて、よ……

第一十葉 再開と戸惑い

愛紗は、呼ばれた気がした。
足が動く。

季節は夏。
新緑の葉が眩しい。木漏れ日も心地良いが、日陰は格別の涼しさ
がある。

湿っぽくはあるが、鬱陶しい程ではない。
澄み渡る蒼穹を両手を伸ばして仰ぐ。

「……軍様」

草原の中に静かに聳え立つ樹。
その巨木に腰かけ、優雅に手を拱く姿があった。

愛紗は駆けた。再会してから、一人きりでゆっくりと過ごせる時
間は初めてだ。

「此處は良いですよ。涼しい」
「そうですね：心地いいです」

隣にちょこん、と座る。

規則正しい自分の鼓動が聞こえる。軍の息遣いを聞く。

緑の香りがする。平和を感じた。

言葉が浮かんでこなくて、口から出たのは社交辞令。

「い、今まで如何なさつていたのですか？」
「今まで、ですか？」

軍は思案顔になる。その様も絵になる。
物静かで、爽やかで、飄々としてて。底知れなさこそあるものの、
それすらも魅力。

義真の胡散臭さとは対照的な印象であった。

愛紗は暫し見惚れていたが、優しく頭を撫でる手に我に返った。

「色々な勢力を見てきましたね」
「勢力を？」

余り血生臭い話はしたくなかったが、それも自分達義勇軍の為なのだな、と返つて興味が惹かれた。

でも、と軍は続ける。

「やつぱり此処が一番、居心地が良い」

微笑みかける。愛紗の心の臓が、一つ、撥ねた。
その黒髪を、風が、優しく撫でる。

「わ、私達のどんなところが！　いい、一番良かったのですか？」
「愛紗も、桃香も、とても愛らしいですから」

愛紗の身体がぐい、と引つ張られた。

そのまま膝の上へとのせられる。嬉しがる以上に驚いた。朱髪が頬に触れる。くすぐつたいけど、良い匂いがした。

これが欲しかった人の……匂い。

恥じらう愛紗。頬に朱が差す。

軍は、少し神妙な顔つきになつて。

「余り一人きりの時に言つ話でもないんですけどね」
そう前置きして、

「少し、都の方で問題が発生してましてね。身の置き方を考えなくてはならないな、と思つたのですよ」

再び愛紗は我に返る。残つたのは自己嫌悪。切実に軍は心配してくれるのに、浮かれてはいる自分が憎らしく。

「どんな……事件ですか？」

平静を装つて尋ねる。

軍は言つて良いものかどうか迷つた。

まあいいか、と一人ごちて後話し出す。

「洛陽で宦官と対立していた何進大將軍が、上洛の檄文を発し、大虐殺を経て、失踪してしまつたのです」

「…」

「重い話ですけどね

問題はそこじゃないんですよ」

軍はふつ、と空を仰ぐ。

どこまでも青い空は洛陽へと通じているのだらう。

「その、大將軍の檄文にいち早く賛同した者が居たのです

愛紗は黙つて聞いている。

これから的情勢は自らの命運を左右する故。

「董卓ですよ」

人差し指を愛紗の眼前に立てる。
それをじいと見つめる愛紗に微笑みかけた。

「少帝弁を廃して、獻帝協を立てて朝廷を恣にする。『董卓』は暴政を極めているのです。……とまあ、袁紹の見解ですけどね」

肩を竦める。

「と嘆ひのむ、私は余り深くまで踏み込めなかつたからなのですが」
曖昧にはぐらかしみた。

軍は自分の意志を告げるつもりは無かつた。
無理に混乱させるよりも、普通の知識だけで良い。
艶やかな黒い髪を撫でながら、『軍は』を細めた。

『反董卓連合』が出来るのも時間の問題でしょ、と『軍は』。

さあ、と風が草木を揺らした。愛紗は髪を搔き上げて黙る。

黄巾の熱も冷めないままこれから、と嘆息してしまう。

「やう難しい顔しないで下へい。じりじりますよ。私が

立ち上がりて一つ伸びをして、軍が手を差し伸べる。
微笑みは温かだ。

その手を握り返す。

この手を握つていれば、大丈夫な気がして。

軍は静かに愛紗を見据える。

「さて 愛紗、立会いましょうか」

同じように立ち上がり伸びをする愛紗に、刃を毀した偃月刀が投げ渡される。

咄嗟に掴みとつて軍を見ると、腰を据え、構えて立っているのが見えた。

それに応える。

武器の刃が陽を反射して煌めく。

視線が交錯して

キン、と甲高い音が舞つた。

「霸ツ！」

どちらともなく踏み込み、鎬を削る。火花が舞つて、再び軍が切り込む。

寸での処で躰す。

服の布がすつ、と切れて肌が覗く。

恥じらう間もなく、軍の戟が愛紗の頬を掠めた。

「実力を、本気を見せて下さ

」

身体を宙で捻る。

い、と動く前に、軍の頬に、つづ、と血が滴る。

「油断大敵ですね、軍様！」

愛紗の口元に笑みが生まれた。

獰猛な物ではなく、単純に愉悦に歪んだ。

「…ええ、その通りです！」

軍もまた嗤つた。

朱色の髪が翻り、刹那の時で偃月刀を繰り出す。

いくら刃を毀してあると云えど、当れば只では済まない。

また宙で身体を捩る。愛紗の服の袖が持つてかれた。偃月刀に力を込めて、返す刀で振り下ろす。

(やつた!)

当つたと思って心の中で歎声を上げた。

彼の得物は偃月刀ではない。しかし、兵神を出し抜いた、と思つ思いは強かつた。

が。

「ふむ。まあ、及第点でしようかね」

轟、と風が唸る。それが振り下ろす刃の速度を緩ませた。

気づけば軍は刀下には居なかつた。

ひとひらの楓の葉が踊つて、愛紗の目が奪われる。集中が切れた。

ふわり、と地に足が付いた。

そこで、こつん、と首元に偃月刀が突き付けられたのを感じた。

つう、と汗が伝うも、恐る恐る振り返る。

息一つ切らしていない軍の笑みが、愛紗の視界に入った。

(無理だつたか)

あと数瞬早く振り下ろしていれば、とか思つ愛紗。

(もう遅い、か……)

潔く偃月刀を投げ捨てる。すると偃月刀が一本地に当つて、小気味良い音が鳴つた。

まだ跪いたままの愛紗に、軍は静かに言つた。

「愛紗、忠誠を、期待しています

俯く愛紗の目が、大きく見開かれた。

風が戦ぐ。

はい、と動いた口。

ちょっとした胸の痛みと、違和感が口の中に残つた。

秋の足音は未だ遠く。

新緑の葉が一枚。

風に煽られて。

舞うよひ、悲しむよひ、空に吸い込まれた。

第一十葉 再開と感い（後書き）

11月23日 若干軌道修正

第一十一葉……始まりを告げる朝

かつて愛紗の朝の日課と言えば素振りだった。

朝の麗らかな日差しを浴び、新鮮な空気を吸い込み、目を覚ます。肉体が目覚めても中々に精神が目覚めない時は、矢張り素振りや自己鍛練が効果的だった。

長い間続いていた習慣。

しかしそれもまた、変化があった。軍の性である。

朝、眼鏡を掛けていらない軍（兵神と云えど睡眠は不可欠）を見るのも新鮮だつたし、また再びの立会いを依頼するのも有意義と考えている。偃月刀での立会いはあれ以来無いが、彼の本領である二刀と鉄扇で立会えうことができた。愛紗は見事に翻弄され地に這いつくばつたが、愛紗は笑顔を浮かべていた。

偃月刀が朝露を帯びて、眩しく光っていたのが目に焼き付いている。

朝の風を浴びた愛紗の声に、軍の声が重なる

珍しく今日の愛紗の朝は遅い。

昨晩は書簡に追われて多忙であつた故だつた。

が、今日の行先は庭では無かつた。

戸を軽く叩いて入る部屋には『会議室』の札が掛っている。

朝議。

扉の向こうには、不本意ながら女性の比率の高い空間があつた。

桃香。鈴々。星。白蓮。藤。雪柳。

そして、軍。と、軍の隣に侍る見知らぬ

誰か。女だ。

以前紹介さ
れた枇杷とか言つ
その総員が桃

香と白蓮を玉座に据えて座つている。

控えの衛兵に、全員に、軽く会釈して、愛紗も座る。

未だ刻限には余裕があつたはずだが

、と不思議

がる愛紗は知らない事があつた。

重苦しい表情の白蓮を見やる。

何かを見ているようだが、遠くて見えない。

どうしたものか、と居振る舞いを正す彼女の耳に、しつぞりと比較的低い声が届いた。

「予想通りでしたよ」

ゆつくりと首を軍の方へと向けると、苦笑しているのが微笑しているのか判断に困る笑みを浮かべていた。ああ、と納得する。また白蓮を一瞥し、苦労性は大変だな、と心の中で呟く。

つまり、『反董卓連合』と見て間違いないのだろう。軍の予想通りなのなら。

「全員、しつちを見てくれ」

白蓮が頭を抱えたそうな表情を浮かべつつ、古めかしい紙の束を机の中心に置いた。

どさり、と重々しい音。

墨がぼけて霞んでいる点もある様だ。

しかし、概ね内容の理解が出来た。案の定である。

董卓の横暴。洛陽の危機。早急な対策の必要性。

おおまかにそれだけの内容だ。

なのにこれだけの紙の量。書かされた文官は過労になるだろう。尾ひれ背びれ所か羽まで生えて飛んでいきそうな文書に、白蓮は頭を抱えていた。

差出人は冀州の袁本初。

どうやら、白蓮の古馴染であるらしい。

行商人の間で洛陽の評判は悪くない。寧ろ良い筈だ。白蓮は引っ掛かるものを感じていた。

「軍。ひれを五割程度差つ引いたとして、これにどれだけの信憑性があるんだ?」

全員の視線が軍に集中した。

ふむ、と呴いて軍は思案顔で瞼を閉じる。

見惚れていきたいのは山々であるが、これは迅速を要する。

先を急ぎたい白蓮に、軍は静かに口を開いた。

「恐らく、十割程度嘘ですね」

「！」

全員の大きく目が瞠られる。

白蓮がうんざりしたように背凭れに深く腰を据え、嘆息した。

「なんだ嘘か。また麗羽の奴が突拍子もないことをおつ始めたと思つたらこれが」

安心したような呆れたような。白蓮はまた溜め息をついた。

しかし、と軍は続ける。

細められたその目は冷酷で切実で、何より先を見据えている。喉まで出かかった反対の意見を、白蓮は呑み込んだ。

「この招聘には、応じようと私は考えています」

有無を言わさない、と言う表現は正しくはない。軍はあくまで淡々と自分の意見を並べているだけだから。

「これから時代、最早漢王朝は形骸どころが過去の遺物となるでしょう」

つまり、群雄割拠の戦乱。

そう語る軍の目にふと何かの残滓のような未練のような色が浮かんだが、それを推し測る術を、桃香も愛紗も持ち合わせていない。

軍の桃香に仕える、という言葉は真摯だ。過去を過去と割り切る。言葉にするのだけならどれだけ容易いことか。

今、劉の血を継ぐ桃香の、超えべき壁に、情けも躊躇もしない。只利用するだけだ。

其処に善悪の価値はない。あるのは勝利か衰退もしくは埋没か。群雄割拠に向けて、やるべき事は弁えねばならない。

言外に伝わる意思に、白蓮は押し黙つた。腑に落ちない、と顔に如実にしている。

「……解つたよ。任せたさ、軍」

「忝ない。納得して戴けたようで何よりです」

軍は一息付いて湯呑みを傾ける。

その様を茫洋と眺めていた桃香は、軍の目指す未来が自分の理想と噛み合っているか、あの夜からずっとはかりかねていた。夢想家ではないられない。相手がいくら軍と言えど、時には圧しも懷疑も必要なときはあるのだ。しかし 件の事項については、軍は多くを知つている筈だ。兵法に精通している軍が、只の勢いで判断する訳がない。

だから、此処は軍に賛同しておいた方が吉だらう。むやみやたらと軍が死人を出すとは思えない。それは大軍を相手にする董卓側にも言えるし、《人中》と謳われる呂布や、名高い張遼や高順等を敵に回す連合側にも言える。

軍には何らかの策があるのだろう、と桃香は結論付けた。

席に腰を下ろし、瞼を閉じる。軍に決定権は無かつたが、異議を唱えられる雰囲気ではなかつた。

惚れた弱みと言つよりは軍に対する劣等感の現れと言えた。

腕を組み思いに耽る。

軍は頭上を駆け抜けしていく言葉を耳に留めよつともせずに田を瞑る。

かりかりかり

枇杷の筆が紙の上を走らせる乾いた音だけが頭に残つている

第一十一葉……洛陽の嘶（前書き）

時は少しばかり遡ります。

第一十一葉……洛陽の嘶

賑わいが洛陽の街に駄する。失踪や虐殺の不穏な中央から離れた町並みは、どこも活気に満ち溢れているようだ。鉄の臭いからは遠く、甲高い鋼の音は聞こえない。

その一角、質素氣味な、清潔そうな茶屋。

軍は、無駄に陽気な酒呑みに絡まれていた。原因は覚えていない。ただ小腹に少し、と入った店先で、銀色眼が物珍しいと云うことが直接的な原因だったような氣もする。

軍の向かいに居る少女の。

艶やかな桜色の唇が盃の水面に触れる。思わずさわりたくなるような。

軍から、呆れたような、感心したような、妙な独り言が漏れた。

「昼から……随分呑みますね」

「あつたり前や！ うちを誰やと思つてんねん！ こんなん呑んだうちにも入らんわ！」

知りませんよ初対面なんだから、と軍は嘯く。あはは、と豪快に笑いながら叩く手は痛い。細身の軍は前揺れる。氣をくと言つよりは豪快。それでも、失いたくないと思わせる傳さは持ち合わせて、中々に不思議に絶妙な少女だ。軍は興味を惹かれた。

ひり、と戸田で容姿を見やつた。

張遼、張文遠。通り名は張来々。

印象的に長い裾の藍色の袴。しかし横の切れ込みからは白い何かが覗く。サラシも女性的な豊かさを隠しきれておらず、丸みを帯び

て柔らかそうである。藤よりも濃い紫色の髪は団子に結われて、覗くつなじは白く綿のようだ。

人懐っこい猫のようで、半袖の軍の腕の傷を柔らかくしなやかに指で撫でる。軍の視線に気付くと、にやあ、と口元を緩めて軍の団子の詰まった頬をむにむにと指でつづく。

すべきえやなあ。にたりと笑つ張遼に、軍は咳払い返した。

「自分、おもろいなあ。それに強そりやし。どうや、一辺手合わせしてくれんか」

朗らかに盃を置き、脇に置かれた堰月刀に手を触れた。目が瞬きだけ、す、と抜き身の刀のように細められた。その途端に忽ち、軍の湯飲みの茶の表面が小刻みに軋むように振動し始めたのが解つた。

再び痴女紛いに目を戻す。

嬉々とした豪気が垂れ流すかのように放たれている。他の客に殺意を悟られない程度に調整する、中々の腕前。軍は、見事、ほうと呴いた。

「……いえ。私ごときでは、相手にもなりませんよ、張將軍」

やんわりとした拒否。思わず右手が懐の鉄扇に触れてしまつた事に軍は自分で気づいていない。張遼の目は速い。見逃すことはない。嘘や、と呴く声は賑わいの中で霧散した。滲み出る霸者の風格に、張遼は出会つたときから圧倒されていたの。強者にしか解らないような、怖氣のするような、血塗れの。

拒絕の瞳を前から見据え、頬を膨らませて、けちい、と不満げに漏らす。大げさに振る舞つのは、動搖を悟られたくなかつた。

顔を近づけて、上目遣いに軍を見上げる。大抵の男はこれに抗えない。

鼻を燻る香りは耽美。熟れた柑橘の甘さ。

豊満な胸が腕と腕に挟まれて、むにい、と柔らかく前に押し出された。

「ま、ええわ。ちょっと面貸しいや」

「はい？」

「面貸せ、言うたんや。黙つて付いてきこ」

余り軍に動じた様子はなく。張遼は不思議がると共に諦めた。むく、と起きあがつて張遼は出口に足を向ける。

「！」

仕方ない、と立ち上がりかけた軍がその形で固まつた。奇妙な体勢で静止した軍に、張遼は柳眉を顰めた。

「なんや、うちに着いてくるの厭か？」

「い、いえ……そう言つ訳ではないのですが……」

歯切れの悪い軍。

煮え切らない彼に、張遼は半ばふざけて、

「おやおやあ？ 恥ずくて言えん」とやつたら、耳元で、な？」
軍の口元へ耳元を近付ける。

脂汗が垂れている軍の、鬼気迫る形相に次第に減つていいく笑み。

「んな……どうしたん…そんな」つづ怖い顔して「

「…………」つづ……」

「ひつひつ」

何百年振りだらうか。

恥ずかしさと辛さに顔を朱に染めて、

「腰が……響つた……」

間を置いて。

あははははは、と腹を抱えて転げ回の張遼を、後でじりじりやうか、と考え始めた。

「これま……本当にやめてくれ……」
「ええやんええやん つけと軍の仲や。あははは、遠慮せえへんといてえ」
「かつて無い辱めを私は受けている……」
「恥ずいんか？ わた、たつきのがきんじょが見とるで。軍、手え振つたりいや」
「おぶられたまま出来ますかッ……」
「あつ、おつ。軍暴れるなや。落つむ、落つむでつ……」
「……」
「あつ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9516v/>

ひらひらと舞う、楓の葉

2011年11月27日12時46分発行